記者は當世斯界の任俠醫として此欄に推賞した。

（六、一、九）

◉醫學士德永保君

△皮膚病泌尿器病の名　手▽

君は越前舊金森藩典醫德永周貞翁の嫡男である、君は卒業後横濱の地を選み開業したるに就ては偶然でない深い緣故があるのである、周貞翁は明治の初年留學生として選まれて横濱に來り當時の洋式醫術を象馬術を研修したりしが、廢藩置縣となりたるより、其儘横濱に止り開業することゝなつた、君は實に明治十六年當港に生れた純粹の横濱兒であるのみならず、小學中學も皆な横濱の仕込であるとすれば、君が當港を選んだのは結局生れ故郷に歸へつたのも同樣で、其緣因の淺からぬと云ふは是れである、君は小學時代より既に德永の麒麟兒の稱あつて、中學、高等、帝大にても優秀の成績を保持したとのことなれば、其頭腦の慥かなることを推知せらる、大正元年九州大學を優等にて卒業後直に同大學の皮膚科泌尿科教室の助手を勤め其蘊奥を究めたのであるから其實力の程も窺知せらるゝではないか、君は未だ三十四歳と云ふ壯年者で、尙前途洋々春海の如くである、其天才的才能に今後の修食を怠らなくば博士號を得るゝとは容易の業であらう。

（新、六、八、四）

◉野方次郎君

古來より刀圭家は國士と稱し、國家の重を以て任ずる經世家が少なくない、現今我國では後藤男を筆頭に、貴衆議院、縣市會議員の職に在る大小政客の數二百頭の上に出て〻居る、野方君の如きも記者の鑑識する所にては確に其範疇の一人者と認めるに至り、君に至る實に廿二世の舊家也とのことである、君は本業たは僻目か?!君は伊豆韮山の產、其先は北條時政たる醫學の造詣深きのみでなく、に出で、北條氏亡びて皈政治經濟書等にも通曉し、特に辯農し中世醫を以て業とす論の雄たるものである、所謂鬼に金棒的に政治家たるの素質と修養を併有して居る、風雲に乘すべき機會の到來近き將來にあらん、蓋し今の政界に起つべき程の人は一押二縹緻の眞諦を味つて掛らないと失敗する、君たるもの豈勇躍一番せずして可ならやである。

野方次郎君

（新、六、六、八）

◉萬治病院長　阿部重男君

福島縣の人數年前赤門を出で青山內科、北里傳染病研究所に入り更に蘊奧を極め、一昨年萬治病院長として就任したのであつた、君は眞摯なる學者肌の人で俗務より超脫して專心斯道の爲めに一身を委すと云ふ點は前掲大藤學士と同型の人である、君が就任當時であつた記者は同院將來の經營やら抱負やら方針やらを聞くべく君の寓居に訪問したことがあつた、君は其重々しき口邊より左の如き意味の談を試みられたやうに記憶する。

『イヤまだ着任早々のことで我病院に對する何等の意見を述ぶべき資料も有せぬが、唯僕が意外の感に打たれたのは病院全體の設備が頗る不完全極まることである、苟も帝都の關門、貿易港の筆頭たるべき大橫濱の市立唯一の傳染病院たるものが此有樣とは何事であらう、僕は此の有樣を見て實にウンザリしてしまつたので、來る早々ではあつたが當局者に向つて先づ以て病院の改築設備の充實を迫つたやうな始末である、實の所是れでは僕は手も足も出せないから、若し僕の意見が容る〻所とならずんば、辭任する積りで居る、人は責任を重んずるのは第一義だよ、月給さへ取ればそれで良いと云ふことは到底僕には出來ぬからね』と記者は初對面から君の責任論に動され、大に君を激勵して其意

見の貫徹に一臂の助力を吝まざるべきを誓ひ辭去したのであつた、由來二星霜君が誠意に當局者も動かされたものと見え、着々改善の緒に就き殆ど面目を一新するに至つた、又々君の理想を實現するには前途尙ほ遼遠だと君は語つて居る、君は此頃二回迄膓窒扶斯に感染した、是に就き君の感想談を聞くに『何うも醫者と云ふ職務は危險極まるものだよ、マー軍人が戰線に立つて居るやうなものさ、何處から鐵砲玉の御見舞を受けるか知れんからねー、左ればと云ふて其を恐はがつて居ては戰が出來んからね、有らゆる傳染病毒は肉眼で見ることの出來ぬ極細微なもので隙を覗らつて人の體內に侵入しやうとして居る、其巢窟に日常出入する職業だから堪らんね、恰度敵の巨砲が列をなして居る前面の彈着點に進擊する樣なものさ、由來我先輩が此敵彈の犧牲になつたものは枚擧に遑あらずだねー、然し職務の爲に犧牲となるのは或る意味の名譽であると自ら慰ることが出來る、古來學者、政治家、宗教家、藝術家等が或は斷頭場裡の露と消え、或は瘴煙蠻雨に冒され蠻族の毒刄に斃れ、猛獸毒蛇の餌食となり、毒瓦斯に中毒し、電氣に震死したるも、畢竟各職務に殉したるに過きぬのであるが、此等の犧牲は實に崇高にして價値あり、其後世を益し、後進を誨へたる功績眞に甚大である、僕が二回の感染の如きは殆ど云ふに足らんよ、又々今後も黑死病にも冒されやうし、虎列拉にも取付かれるであらうよ、何に!?豫防法!!……其れは充分注意はするさ、人事は盡し得らる丈け盡すがね、前にも云ふた通り目に見えぬ厄介な敵を相手にするのだから誠に始末に困るのさ、紺屋の白袴だつて何にそんな

ことは無いさ、僕だつて犬死はいやだからね』と、君が責任觀念の旺盛と犧牲心の熾烈なる當世稀觀の人と云ふべしである、記者は我傳染病院に斯る眞摯にして忠實なる院長の就任せらるゝを見て、人意を强ふすること幾何ぞと思ふのである、庶幾は好漢の健在を祈り將來を祝福する。

（新、六、七、五）

◉早野連之助君

△齒科醫の領袖▽

醫術の進歩は漸く細微に渉り、更に專門の專門と云ふ風に區分せらるゝ傾きがある、最近に醫術の專門區域が內外科眼科の三部門に過ぎざりしものが、更に內科に於て腦脊髓神經、呼吸器、泌尿生殖器、胃腸等に外科に於ても耳鼻咽喉科とか、肛門とか、腟腸とかに區別せられ、尙ほ追々細分したる專門に亘るべき傾向がある、特に齒科に至つては全く法定上の專門として往時より特種の醫術界に置かれたるもので、其發達進歩の徑路に於ても自ら異なるものがあつた、實際齒科中でも義齒等の眞個專門技術に屬する方面に至つては普通醫師の企及すべからざる一種の熟練的技能を要するのである、されば普通醫師の專門部外に獨立して、別個の醫業を爲し其勢力の侮るべからざる內にも、我神奈川縣には立派に門戸を張り獨立せる齒科醫は百數十名を以て數ふと云ふことである、其齒科醫中に於て早く已に頭角を現はし、現に齒科醫師會長として斯界の牛耳を採りつゝあるは、橫濱市住吉町に開業せる早野君である、君は技能の優秀なるは勿論であるが、資性溫厚長者の風ありて、自然の間人をチヤームする德を有して居る、門前常に市を爲す盛況の割には餘り金を溜めたる模樣なく、常に貧者を恤み弱者を救ひ、且つ公益事業の如きは利害を打算せず投資すと云ふ風に斯界に多く得易からざる人物である、聞く所に依れば君は少壯時代に非常の逆境に在り、轗軻不遇の地に座して、勉勵苦學したる經歷を有し、何れ其修養が高潔にして同情ある今日の人格を組成したるものなるべしとのことである、齒科醫師中特に君を本欄に選載せるも、主として後段人格を推賞するの意に外ならぬ。

（新、六、五、四）

◉入江英哉君

市立十全醫院の小兒科部長たる入江君は、四十二年京大醫科の出で新進學士の一人者である、君は溫厚篤實なる學者肌の人にして、其頭腦の明晰なるには驚くべきものがある！……推理、判斷、記憶の力に富んで而も頗る勤勉家である……職務に忠實!!之は何職に從事する者でも人生の最大要素たるに相違なきも、人間の生命？に直接關係を保つべき醫師界には特に緊切な一大要素であると云ふ?!最も忠實と云ふものにも種々の區分があらう、或はバンの忠實——名譽の忠實——天職の忠實——の如きが夫れてある、然して入江君は確に天職としても忠實であるやうだ、一例を擧くると入代り立代る數十名の患者を日々取扱ふにも拘はらず、曾て一度接したる患者に對しては其氏名年齡は固より、脈搏體溫表をも記憶してレセフトを捲くつたり、助手看護婦に聽いたりすることは稀れてあるに徵しても分る、固より天禀的明晰なる頭腦の作用にもよるべきなれと、畢竟患者を大事と思ふ親切心即ち天職を重んずるからであらねはならぬ、萬事は一事で君が凡ての動靜中には此美麗なる彩華の影が流露して居るやうである。

（青、六、二）

◉足立徹夫君

君の學歷に就ては多く知ることを得さるも、三十九年十全醫院の產科婦人科部長として今日に永勤して令聞嘖々少しも聲價を損せぬ所より見ると、君か優秀なる技倆を認むるに足るであらう、君にも前の入江學士と同じく醫者に無くて叶はぬ要素たる、溫厚、親切心、勤直の美質を備へ孜々兀々自已のベストを斯の職に傾盡して倦色がない、嗚呼市立十全病院!!!よくも又材を選當したもの乎と記者は感心に堪へぬ、同院か隆々冲天の盛を極むるも眞に由しあるかなである。

（青、六、二）

◉新に耳鼻咽喉科を開院せる淺香一忠君

新に市内宮川町に宏壯なる洋館を建て、新進の技術を精巧なる器械に應用すべく開業したる、耳鼻咽喉科の名手淺香一忠君は熊本縣の人四十五年盬田博士に就て外科を專攻し、後ち順天堂病院の千葉博士の助手として耳鼻咽喉科に其奥を極めた人である、聽く所にては斯界の泰斗千葉博士も淺香君の手腕に容るし獨立開業を慫慂せし程にて實際君の實力は非凡のものありとのことである。

淺香一忠君

◉大西病院を勇退したる飯野、内田兩醫學士

記者は前月號にて大西病院を記するに當り、新進の兩學士を紹介し置きたるに、其後間も無く同院主大西正雄と衝突して兩學士袂を連ねて勇退し、飯野君は蓬萊町に、内田君は宮川町に新に堂々たる門戸を張り開業するに至つた、記者は之を聞て兩君の爲に祝意を表せさるを得ぬ、實は兩君が新知識を得て社會に出でたるに拘はらす、大西如き營利一方の私立病院に雇使され、錆の付きたるメスや、陳敗した藥に拘束せらて驥足を展ばすことの出來ぬを腑甲斐なく思つて居つた矢先てあつたからである、記者は兩君の前途に祝福して已まぬ。

因に　飯野君は是迄市内蓬萊町に假診察所を設けて診療に從事しつゝありしが五月中旬より市内羽衣町一丁目（舊羽衣座芝居茶屋跡）へ改築移轉内科、小兒科を標榜して診療に從事しつゝあるが相變らす門前市をなすの盛況である。

又内田學士も市内宮川町に於て相變らず小兒科を以て盛況を馳せつゝある。

◉六角病院長　六角謙吉君

山椒は小粒でもピリッと辛い、六角君は風貌凄瘦、擧動敏活隼の如く、人呼んで今太閤と綽名するも宜べなりである、君は資性剛直にして清廉なる丈け夫れ丈け、俗に阿つたり節を賣つたりするやうなことなく、爲に往々世間より狷介偏狂の人を以て目せらるゝやうであるが、記者は多年君の言動に經驗するに決して偏狂でも狷介でもない立派なる人格者で、寧ろ當世稀に觀る好紳士典型的人物である、君が傲然女乘馬車に反り身となつて乘り廻はす態度は聊か氣障な所はあるが、其氣短な氣性にも似ず患者に對しては頗る懇切丁寧を極め、特に貴賤上下の差が職務の前にあるものかと云ふ風に誰彼の區別を措かず一患者として接する所に君の特質が顯はる、君は横濱市では元老株の開業醫て、曾て明治の初年北海道開拓使醫學部に入り米醫に就き研鑽數年に亙り、該米醫と共に横濱和蘭病院に轉勤せしは明治十一年の昔であつた、續て十全病院に轉勤し、三十二年には現時の中村町の一角に聳ゆる高丘に一大私立病院を設置し更に境町に分院をも建てゝ大に其妙腕を振ふに至つた、三十七年光榮にも選拔を受け伏見宮殿下御渡米の御附醫官を拜したに見るも君の技能の尋常ならざるを證するに足るであらう、君は獨立一大病院々主として經營縱横の才を發揮し内外人の患者常に門前に市を爲す繁忙

の身を以て、裁判公判等にて重大なる外國人事件の通譯の任にも方り、且つ横濱市傳染病豫防委員、船舶檢査員、港務課醫務顧問、小學校恩給金顧問等の職をも勤めて居る精力家である、記者をして他日我刀圭界史を編述せしめは、君も亦確に其奇傑部に編入せしむる一人者であるゝ信する。

◉松本五郎君

△新に就任の十全病院耳鼻咽喉科主任▽

仁保學士の後任として新に十全病院耳鼻咽喉科部長の椅子に就いた君は、未だ三十二歳と云ふ壯年者であるが、腕は慥かなものであるそうだ、君は温厚篤實なる學者肌の好紳士で、大正二年九州大學醫科を優等にて卒業後、直に同校の耳鼻咽喉科教室の助手として專ら同科の研究に一身を委ね、更に近藤、長與兩博士の推薦を以て東京帝大の同科に入り益々其蘊奥を極めたのである、十全醫院では非常に好評を博した仁保學士が一身上の都合あつて同院を去るに至りたるを以て、之に勝るとも劣らざる名手を物色して漸く君を得たとの事であるから、其實力の充分なることも推知が出來る、現に就任の日尙ほ淺きにも拘はらず、其優秀なる妙腕を認められ同科の診療室は日々充滿の盛況を呈して居る君は記者の訪問に接し其忙はしき十分間を割いて、謙遜な態度で語る『私はまだ就勤して僅に一ヶ月にしかなりませんので、當市の方角さへ判らぬ位ですから、本院に對する意見とか抱負とかの浮ぶ何物も有する筈がありません、唯だ〳〵斯う患者諸君が續々來て呉れると云ふのも、畢竟前任仁保學士の殘した所謂餘澤とも云ふ可きものでしやうと存じますので、大に感奮の情を動され、微力ながら自己のベストを盡して之に報いやうと考へてゐる位です』と以て其人格も想像せらるゝであらう。

◉松岡正己君

△十全醫院內科擔任▽

君は千葉醫專出の俊才で、小田原の舊家松岡家の養嗣子である、明治三十六年卒業後佐々木醫學博士の門に入り實地を研究して四十三年當院に聘せられ、爾來十年一日の如く孜々として院長を補佐して內科を擔任其妙手を振つて居るのである、君は恬淡洒落で人に接して障壁を設けぬ、まことに氣持可き醫者らしき醫者である、院長の女房役には些と惜しき感がある人物であるが、今の院長には無くてならぬ人かも知れん、君の爲に自重を望んで已まぬ。

◉藤井幸雄君と得田易君

孰らも古い裁判醫として人に知られて居るドクトルであるが、其性格の異なる點は月と鼈墨と雪と云ふ古い譬へどころじやない、藤井君は頑骨稜々意志強堅なる古武士の風あるに反し、得田君は容姿瀟々圓轉滑脫なる才子肌の人である、藤井君が司直府の醫師たる技倆は双方何れも甲乙なく充分に有して居る。

得田易君

老熟せる識量より出づる檢案書が適確秋毫の危げなきに對し、得田君が新鋭の學術に根據し條理整齊せる鑑斷を下す點、兩々對照して其徑路の相異なるものあると同時に、其結論に至つては一致するのである、道が

◉坂入道賢君

重厚自ら持して苟も山師の玄關なる跡なく、切々として患者に接して倦む所を知らず、市内の一偶南太田久保山下に晏如たる坂入君は當世多く得易からざる君子的ドクトルである、君が傍人に語る所に依ると、醫師が一旦地を卜して開業したる以上は、其附近一帶の地を自己の縄張として、成るべく他所を侵犯せざる樣心懸けざるべからず、是れ他人の利益をを奪取すると云ふ不德義に陷る丈りにあらずして自然遠隔の地に進出するときは、其處に勢力の一部を殺がれ縄張内の患者に薄ふするに至ればなりと、以て君が受托の患者に接することの親切懇篤を極むる一斑を窺知するに足らん、君の閲歴は多く知ることを得ざるも、内外科の實際家としての技倆優秀なるは一度君の治療を受けし患者の口より嘖々として嘆賞の聲となり發する爲に依り證明して餘ある。

◉石浦德太郎君

山手一般病院の副院長たる君は、温厚篤實なる典型的人物の一人である、世に終始一貫と云ふ熟語が存する限り、君は此名譽ある熟語を冠せらるゝ資格があると思ふ、實に君は終始一貫にて同病院が廿五年前外人の手に創建せられた當初より今日迄事實上の院長にて精勤して居るのである、元來同院は外國人本位である丈け、夫れ丈け、外國人の醫師を信頼すべき筈であつて、名義のみ院長は外國醫を戴き、醫院も主もに外人なるも、石浦君の信望は殆ど破格となつて此律外に在るは不可思議である然して其處に君の偉大が現はれるのである、思ふに君が斯道の造詣深く技倆の異常なるにも因るべきも其誠實の二字が信望を繫ぐ主なる鍵鑰ではあるまいか、該病院が在らん限り君は無くて叶はぬ柱石と評せらるゝは當然である。

◉横濱十全醫院新幹部

△院長醫學博士氏原均一君△

△副院長醫學士片山久壽賴君▽

横濱唱一の市立大病院として其設備萬端に改善を加へ、日に進歩隆昌を來し居ることは既に周知の事實なるも、茲に百玉中の微疵とも云ふ可きは、抗倆は兎に角已に老境に達したる山根學士を院長に戴き居りし點であつた、今や市内には新進學士の數三十名の多きに達し、特に外科には博士難波要君内科には博士大野禧一君が盛名を馳せつゝある間に介在し、苟も市立の名に於て老衰學士を擁立せるは其權衡を失するものとの非難の聲喧しかりしは無理からぬ事象であつたのである、最も當局者も之を知らざるには非らざりしも、多年缺點もなく精勤せる院長を馘首するに忍びざる情義あり、彼が退隠期近きを待つて居つたのであつたそうだが、偶然にも山根君は去る五月中遠逝したので機會到れりとして、元臺灣病院長の氏原博士を迎へて院長に推し、片山學士は大藤學士の副院長の椅子を襲ふたと云ふ段取であつたのである。

氏原博士は四十二歳の男盛りであるが、一見頭の禿げ工合より五十幾歳位の値打に蹈まれる色男と云ふ方面よりは一割損に見えるが、院長なる實祿より觀ると却つて其れが得である、頗る快濶の方で

記者が始めての對面にも氣持よく應待せられた、霊骨に云へは鬱森の氣の無い無邪氣な書生風な人であるが、道が初對面の記者が『何か御感想でも？』とやると、『イヤ赴任早々何等感想ほどの浮び出る邉がありません、勿論抱負と云ふ樣な堅苦しい何物も有しません、唯此上は誠意を以て職に盡し諸君の援助に依り責務を完ふするの外ありません』如才ない應答ぶりは頗る善かつた。

博士は三十七年東大醫科の卒業で、陸軍々醫と爲り、四十二年臺灣總督府病院長に轉任した、大正二年休職の儘獨逸に留學し、同三年十一月戰亂の爲め歸朝し東大の入澤内科に入つて研究する所あり大正四年復職を命ぜられ臺南病院長に任ぜられ、大正六年論文提出博士の榮冠を戴くに至つたのである。

片山學士はドッシリと落着のある態度で、莊重なる語音で人に接する塩梅は陣笠の器ではない、學士は頗る篤學の士で四十年東大卒業後近藤外科に副手として研鑽を續け、四十三年熊本病院外科部長兼同醫學專門學校教授、四十五年廣島病院外科部長、在任中大正四年東大に入つて外科を專攻し其蘊奥を極めたのである、學士の恩師近藤、長與兩博士は與に口を極めて學士を稱揚して居た、曰く頭腦明晰、篤學、圓滿、高潔等有らゆる贊美の熱語は兩博士の口より迸出したのである、既に論文提出中で近き將來の博士であることは云ふまでもない。

記者は先づ以て十全病院幹部に適任者を選任したる當局の勞を多とする、唯だ此上は兩者たるもの

各々其妙腕を振ひ吾人市民の期待に滿足の實現を與へられんことを熱望して已まぬのである。

雜　錄　の　部

◉入社の辭

予や永年官海の小天地に蟄局せられたる一介の老措大なり、羈紲の身心爲めに萎微として振はず、管窺の眼界隨て窄狹し、觀察力の鈍磨斷案論評の失肯は當に來るべき、必然の結果なり、然も椽大の筆を持するにあらず、李彦の量を有するにあらず、何の見る所何の據る所ありて、身を操觚界に投じ社界の中堅、邦家の柱礎たる青年及青年團に對する、唯一の權威者將師友を以て任ずる我社の末席を汚さんとする歟、曰く是れあり、一片碎屑の至誠と耿たる後樂の微忱は、轉た當世に禁ずる能はざるものあれば也、況や我社の創業者にして經營の殊勳者たる凱風設樂君は麗澤の契交傾蓋の畏友にして、意氣相容れ同志相和するものあるに於て哉。看よ看よ、方今我國士氣の頽癈を、思想界の混亂を、君國の志念衰退を、上下を擧げて虚榮に傍なみ、各階級を通して奢驕に憧がれ、滔々として濁流汗流底止する所なからんとす、豈澹庵ならざるも長大息を禁ずるに勝ゆべけんや、又看よ、堂々として帝國立法の大義に參與する代議士魏々たる干城の武夫、森嚴侵すべからざる司直の法官、蹇々匪躬たるべき保安の警吏にして尚且つ汚穢醜行を敢てして平然たるに至つては、翹たに文官錢を愛し武人命を惜むの非德を責むるに止めて已むべき小事ならんや、特に我社友讀者諸君と浩嘆すべき一事は、彼の滔

天の大逆幸德一派の輩に、我國上下三千年金甌無疵の歷史に一汚點を印せられたるにあり、嗟吁、彼を思ひ之を思ふに憂心忡々深夜鷄鳴を聞かざるも、褥を蹴つて起たざるを得んや、余に尙方の斬馬劍なしと雖も、又た一管の禿筆を有すあり、爾今本誌の論壇に立ち縱橫鉈鉾を選等の頭上に加ふる所あらんとす、若し夫れ當社には一貫したる主張と、終始すべき主義の嚴乎として存するものありて、恣まに時事を論じ政治を議するの自由を有せざるは勿論なりと雖も、苟も矯俗從風の大任を遂行すべき責務を全ふせんとせば、勢ひ社會の各方面に亙り政治の根本に進み論評批判の筆を下すを免かれざるなり、如何となれば吾人萬般の生活及思想問題は、社會の良否政治の善惡に、甚深痛切の關係を有すればなり、予が不敏と雖も一片の理想と一個の抱負の存するものあり、斯の理想と抱負の怎に實現する乎は一に今後の本誌數頁の內にあり、省みて駑鈍の識禿疎の筆能く此の責を塞ぐを得べきや否哉、冀くは寬容なる主筆已下同人の驥尾に附き、駑馬十駕の勞を以て進まんがな、是を以て入社の辭となす。

桑島君は能吏なり、而して余が莫逆の友なり、永らく職を神奈川縣警察に奉じ溝、浦賀、都田の署長に歷任し令名ありしが今回職を辭するに到る、即ち平素の主張を實現せん爲め相謀つて神奈川縣に支部を設置し君に其主任を囑托することゝなれり、君の經歷は將來の成功を疑はず、願くは神奈川縣下諸君翼賛の勞を採られんことを、敢て請ふ（設樂凱風）

（青、四、二、一）

◉塵窓贅語

【一】

△杜子美を憶ふ、盛唐の杜甫字子美は、詩に於て聖なるのみならず、其人格（パーソナリチー）に於けるも又聖なり、特に熱烈燃ゆるが如き忠誠、皎潔雪の如き進退、溫乎玉の如き慈愛の美德に至つては、千歲の下吾人をして、欽慕の情に勝へざらしむるものあり、蘇東坡が甫を評して『詩は情に發して忠孝に止る、古今詩人衆し、而も公を首となすものは、豈其流落飢寒身を終る迄で用ゐられずして、未だ一飯も嘗て君を忘れたるを以ての故に非らざる莫きを得んや』と知言と云ふべし、又韓退之は詩聖李白と並稱して『李杜文章在。光燄萬丈長』と激賞し、楊萬里は『李は詩に神にして、杜は詩に聖なり』と亦桂湖村は『李は天才にて作り、甫は學力にて練り、李は老子風にして出世的なるも、甫は孔子の如く世間的なり、故に前者は瓢然として端倪すべからず、後者は常に慷慨血に泣くの趣あり』と穿ち得て適評と云ふ可きなり。

△杜甫の作詩は一として、麗句瑰章金科玉條ならざるは莫きも、就中人口に膾炙し、集中の最も白眉たるのみならず、古今の絕唱たるべきものは北征なり、北征は安祿山の亂、唐の玄宗蜀に奔り、肅宗

靈武に即位し、杜甫京師より遁れて肅宗に鳳翔に謁し、左拾遺を授けられしが偶々宰相房琯陳濤斜に敗衂したるの故を以て其官職を剝がれたり、甫は舊誼を重んじ、上書して琯の爲に辯疏大に力むる所あり、肅宗震怒以て琯に黨するものとし、三司に詔して甫を糾彈せしめしが、宮相張鎬の爲に僅に放還せらる、時に甫の家鄜州に在り、賊兵所在出沒して掠奪を恣にし、老幼溝壑に轉ずるに至りしかば甫は鄜州に歸省し、以て妻子の安否を訪ひしなり、詩は即ち當時に咏唫したるものなり、此詩や甫が絶妙の技發揮したるに止まらず、彼が有する凡ての性格（キャラクター）將た個性（インヂビヂュアリティー）の躍如たるものあり、一誦二嘆親く甫の謦咳に接するの感あり、塵窓の下獨り唫誦するに忍びず、左に邦譯して敢て讀者と與に、彼が俤を偲ふることゝせり。

兆　征

皇帝二載の秋、閏八月の初日、杜甫將に北征して、蒼茫家屋を問はんとす、維時艱虞に遭ひ、朝野暇日少し、顧て慙つ恩私を被るを、詔て蓬華に歸ることを許さる、拜辭して闕下に詣り、怵惕久しくして未だ出でず、諫諍の姿に乏しと雖も、君の遺失有んことを恐る、君は誠に中興の主、經緯固に密勿なり、東胡反して未だ已まず、臣甫憤ほりの切なる所、涕を揮つて行在を戀ふ、道途猶ほ恍惚、乾坤瘡痍を含む、憂雲何の時か畢らん、靡々阡陌を踰れば、人烟渺として蕭瑟たり、遇ふ所多く傷を被る呻吟更に流血す、首を回せば鳳翔縣旌旗晩に明滅す、前んで寒山の重るに登り、屢々飲馬窟を得たり、

邠郊地底に入り、涇水中に蕩潏す、猛虎我前に立ち、蒼崖吼へ時に裂けんとす、菊は今秋の花を垂れ、石は右車の轍を戴く、青雲高興を動かし、幽事亦悅ぶべし、山果多く瑣細なり、羅り生て橡栗を雜ゆ、或は紅くして丹沙の如く、或は黑くして點漆の如し、雨露の濡す所又、甘苦齊しく實を結ぶ、絹に桃源の內を思て、益身世の獨を嘆ず、坡陀として鄜畤を望めば、巖谷互に出沒す、我行已に水濱、我僕猶木末、鴟梟黃桑に鳴き、埜鼠亂穴拱す、夜深く戰場を經れば寒月白骨を照す、潼關百萬の師、往者散すること何ぞ卒かなる、遂に半秦の民を令て、殘害して異物とならしむ、況や我胡塵に墮ち、歸に及んで盡く華髮、年を經て茅屋に至れば、妻子衣百結、慟哭すれば松聲廻かなり、悲泉共に幽咽す、平生嬌る所の兒、顏色白くして雪に勝れり、爺を見て面を背て啼く、垢膩脚襪せず、牀前の兩小女、補綴方に膝を過ぐ、天吳紫鳳に及び、顚倒して短褐に在り、老夫情懷惡し、數日臥して嘔泄す、那ぞ囊中の帛の汝が寒して凜慄たるを救ふこと無きや、粉黛亦包を解き、衾裯稍々羅列す、瘦妻面復た光り、癡女頭自ら櫛る、毋に學で爲さゞるはなし曉牀手に隨て抹す、時を移して朱鉛を施す、狼籍畫眉濶し、生還童稚に對し、飢渴を忘れんとするに似たり、事を問ふて競ふて鬢を挽く、誰か能く即ち眞喝せん、驕つて賊に在りし愁を思ふ、甘て雜亂の聒きを受く、新に歸りて且つ意を慰む、生理焉ぞ說くことを得ん、至尊尙ほ蒙塵、幾の日か休して卒を棘らん、仰で觀る天色の改るを、坐して觀ゆ妖氛の豁なるを、陰風西化より來り、慘憺として回紇に隨ふ、其王は助順を顯ひ、其俗は馳空を善くす、

兵を送ること五千人、馬を驅ること一萬匹、此輩少きを貴と爲す、四方勇決に服し、用ふる所皆鷹騰、敵を破ること箭の疾きに過ぎたり、聖心頗ぶる虛佇す、時議氣奪れんと欲す、伊洛掌を指して收めん、西京拔くに足らず、官軍深く入らんと請ふ、銃を蓄へて俱に發すべし、此擧靑除を開き、旋して恒碣を略するを瞻ん、昊天霜露を積み、正氣肅殺たる有り、禍ひ轉じて胡を亡すの歲、勢成り胡を擒ふるの時、胡命其れ能く久しからんや、皇綱未だ絕つ宜からず、憶ふ昨狼狽の初、事古先與別なり、姦臣竟に醢々せられ、同盟隨て蕩折す、不聞や夏殷の衰へしときを、中自ら妹姐を誅するを、周漢再び興ることを獲たるは、宜光果して明哲ならざればなり、桓々たり陳將軍、鉞に伏して忠烈を奮ふ、再徽りせば人棐く非ならん、今に於て國猶ほ活く、凄凉たり大同殿、寂寞たり白獸闥、都人翠華を望めば、佳氣金闕に向ふ、圍陵固に神あり、灑掃數々不鍼、煌々たり大宗の業、樹立して甚宏遠なり。

（靑、六、十一）

【二】

△國民の最大記念すべき大典は終れり、聖覆既に即位大嘗其他の盛典を擧げさせ給ひ、轅を旋して龍顏特に麗しく帝都に還幸し給ひ、玆に踐祚第一春を迎ふるに至れり。

△吾人は月並式にお芽出度の套語を交換するを以て滿足する能はず。聊か國民前途の希望と覺悟とに對して敢て一言を加へんかな。

△世人動もすれば、明治を以て勃興隆起の時代とし、大正を以て守成堅持の時期となす、吾人を以て見れば、我國の勃興隆起の時期は寧ろ今後の大正にありと信ず。

△勿論明治の創業と勃興は、世界歷史のレコードを破り、其文明攝收の敏速なる點に於て、民族史上の奇蹟たりしと雖も世界の大局よりせは、文明的價値に於ては、眞の十の一つにして足らじ。

△近頃日蓮主義の傑僧、田中智學師の著書『世界統一論』を讀む、其言說往々驕衿に失するの嫌なきにしもあらざるも、國體の淵源、民族の特質より立言し、宗祖日蓮上人敎義の三大秘法を按配し世界の大勢に論及して、統一の歸結を聲名したる邊、尋常凡暗學者や、陣笠政治家等の到底企及し難き卓見なり。

△田中師の說論せる如く、果して我國が世界統一の盟主たり得べきや、今俄に評斷する限りに非らざるも、凡そ國民の道德的、文明的價値なるものは、自己の意志を世界に貫至するに於て始めて現はる。

△科學、藝術、商工業等、其大なる工業を世界に赫奕し、他國をして之に師事せしめ、臣隨せしめ、以て人道に貢獻するに於て、始めて國民の價値ありとすべし。

△明治の功業は大は即ち大、偉は即ち偉なりと雖も、此見地よりせば、僅に勃興の過程たるに過ぎじ、尙過程より一歩を踏み出し、功業を達成せしむるは、吾人國民が將に大正の聖代に負ふ責任たり。

△況や世界的大問題は、今や接踵して我四邊を圍み、吾人に其解決を迫り、且此任に堪ゆるもの、我

を於て他にあらざるをや。

△求むるものは與へられん、吾人大正の國民たるもの、大に求めずして可ならんや、求むる所大ならんか、酬ひらるゝもの少ならず、大正國民が前途の希望と覺悟は、飽迄進歩的にして、熱烈火の如きを要す、區々たる名分論を以て、腐儒の舉に倣ふは、吾人の採らざる所なり。

△三千世界我の一念に在り、忠孝節義素と之より發足せんのみ、我は自己の爲に活く、若し國家社會にして與にせんか、彼は先づ我膝下に來りて跪拜して可なり。

△他人に訓ふるは、固より我の難ずる所、人に與ふるも到底能くする所にあらじ、唯我は我あるのみ、彼の紛々擾々たるもの、我に於て何かあらん。

△我は稀觀の天才を愛す、天若し一個の天才を我に降せば、吾人は如何なる犧牲を拂ふにも躊躇せじ、蠢爾として生れ、倏忽として往く、世の幾億の凡俗あらんよりは、我は一人の天才を望むや切なり。

△凡そ教育なるもの、幾億の凡人を造るにありとせば、吾人は寧ろ教育なきに若かじとせん、假に天才なき人間界を想像せよ、釋迦、基督、孔子、ソクラテスなく、沙翁（シェクスピヤー）、ゲーテ、プラトーなき世界の歴史ありたりと想像せよ、ア、誰か、此の如き想像に堪へ得るものぞ。

△風俗を造るに、曷ぞ教育を煩はさん、世に非常の事多し、非常の事に處するには、非常の才を要す若し風俗の衆愚をして蠢動せしむるも、此際に於て何の益する所ぞや。

△幾千萬の生靈は斃れたり、然れども一奈翁（ナポレオン）の名を、歴史に留むるなくんば、此百世の名は朽敗せしのみ、封建幾百千の大小諸侯は倒れたるも、南洲、甲東の俊髦あらざらんか、我明治赫々の大歴史を奈何せん。

△吾人は曾て青年の自覺を論せり、自覺の要は二あるのみ、已の小さきを覺るは其一なり、已れの大なるを信ずるは其二なり、前者は釋迦、基督の教義にして、後者は奈翁（ナポレオン）、ニイチエの信條なり。

△人間を超越して神となる、已れの小さきを覺る所以、人間其儘にして神となる、已れの大なるを信ずる所以なり、此兩意義を除いて自覺なるものあることなし。

△已れの小さきを覺らされは自奮せず、已れの大なるを信ぜずんば自重せず、奮つて重んぜざれば猪勇、重んじて奮はざれば因循、吾人は之を以て人生の眞諦にして、然かも處生の妙訣是に存すと信ずるものなり。

△世に迷信を忌むものあり、然れども、吾人は寧ろ道學先生の、固陋なる道德觀を怖る、基督を十字架に上せたるもソクラテスを毒殺したるも、皆是等道德說に胚胎したるに非ずや。

△往昔クロンウエルはダンバーの戰を以て、是れ人事に非ず神事也と絶叫して、曠古の大事業を成就せり、今日の道學先生の眼より視ば、是れより大なる迷信は無からん、然れども、此絶大の迷信より出發せる、クロンウエルの偉績は、百載の下、吾人に其惠澤を露被せしむるに非らずや。

△吾人は思ふ、迷信、眞信、畢竟關する所にあらじ、人生の眞諦唯夫れ不撓の大精神に在て存す、今人既に小賢くして、祈ることすら閑却す、曷そ不惜身命の大勇猛心を以て、クロンウエルの偉業を踐蹤するに足らん。

△聖僧日蓮上人が、一切偉大の事蹟中、特に光明の赫奕たるは、不惜身命の云爲なり、彼が四面法敵の中に立ち、法華經の爲めに命を捨つるは、砂に黃金を代へ、糞に米を替ふるが如しと絶叫したり。

△彼れ是れが爲めに、住所を逐はるゝこと二十餘度、或は夜襲により庵室を燒かれ、或は要擊せられて眉間を割かれ、或は弟子を殺され、擅越の所領を沒せられ、或は伊豆に流され、佐渡に謫せられ、甚しきは斷頭臺上紫電一閃萬事休するの、危地に迄陷りたることあり。

△彼は昂々然として曰く、『吾れは是れ、粟散の邊土安房東條の旃陀羅が子、身賤くして性劣れり、智解に於ては天臺傳敎か千分の一にたも及ばじ、されど法華經の行者なるが故に、即ち是れ一天の眼目四海の柱石たり、六難九易の敎三障四魔の說は素より熟く知れり。

△唯法末不祥の世に生れたる身の法王宣旨默し難く、身命を拋つて救世の大願に志したりと』畢竟日蓮上人の不惜身命の大勇猛心は、法現の宣旨其もの〻一發作に皈す。

（青、五、一、一）

【三】

往年余が第二高中に在學のときであつた、郊外の禪刹に、博聞强記、佛學の蘊奧を極めたるは勿論、古來東西の哲學、文學に通じ天文、地理、歷史の學迄涉獵し、其性恬淡寡欲、其行不羈狷介なる名智識があつた、然し當時は餘りに行藏趣舍の奇異なる爲め、俗界に容れられさるのみでなく、往々怪僧又は生臭坊子なりとて嘲罵の聲さへ浴せられた、余は好奇心に驅られ、彼の造詣を試驗すべく一日其禪門に探檢と出掛けた、刺を通じ來意を告くると、彼は自身玄關に出て爛らつと異樣な目を睜り、一瞥を余の面にするや、呱々とばかりスタ〳〵踵を廻はし彼の居間に案內したのである、一見余の驚いたのは、其居室に入るや紛々として磐若湯の香鼻を衝いたのも道理、室の最中に少し剝げかゝつた朱塗の膳には、滿々と盛りたる鯉魚の刺身皿と、琥珀色なす、磐若湯の爛瓶とが所謂杯盤狼藉と載せてあつたのである、加之彼は其長大なる體軀を膳側に橫へ、イヤ失敬々々君も些と樂みにして磐若湯でもやり給いには、更に斗膽を拔かれ二の句が出なかつた、然し恁う驚いてばかり居ては、探檢の目的を達することが出來ぬから、氣を取直し、更らに平らき直つて、イヤ余の今日推參せるは餘の儀にあらず、貴僧の高敎に依り俗腸を洗ひ、悟道の域に達することを得ば幸甚なり、冀くは垂示を吝む勿れとやつた、彼は半開半睡の體にて余の陳述を默聽し居たりしが、ヤヲラ橫へたる魁偉の圖體を起し先づカンラ〳〵と豪傑笑一番の上、善哉々々儕の發心殊勝なり、酒家儕の爲に學業と併用し悟道を誨へん、左りながら、禪道は廣遠無邊である、一朝一夕の座談を以て悟了せしむべきではない、眞に志

あらば自今毎日曜の休暇を利用し我禪房を叩かるべしと　御詫宜であつた、試に毎次の日曜を期し彼に親むに隨ひ、其博識强記の偉才に敬服するに至つた、特に彼の哲學を基礎とせる莊子の講說を聽くに及んで、彼が造詣の深きに驚嘆せざるを得なかつた、彼は漢籍の素養の深きは勿論、英佛獨支の語學にも通曉して居たのである、彼の學歷はと調べて見ると六才の時より或る禪寺の小僧となつたので、學校敎育は皆無と云ふことである、つまり獨學にて恁く該博な學問を獲得したのである、實に世にジニアスなるものありとせば、此僧の如きものを指稱するのであろうと思つた、內に就て彼が得意であつて余に推奬したる第一でありし莊子は、其說く所深邃、其論する所玄妙で、最も興味を以て聽へたのであつた、隨て一々彼の口述を筆記して餘まさなかつた爲め、遂には尨然たる一大冊子となつた由來世事倥偬繙讀するに遑なく、束ねて空く筐底に沒すること廿有餘年に至つた、此頃小閑を得たので筐底より拉し出して、摘讀して見ると却々興味の湧き出づるものがある、其緒言の一節にこんなことが書てあつた、『西洋にアリストテレス、カント、ヘーゲル、ルーソー、ミル、スペンサー等の碧眼哲學あるを知り、我東洋に黑眸の大哲學者莊周其人あることを識らざるは、之れ自家の奈良漬あることを忘れ、隣家の糟味噌を羨むと一般、其近視眼に驚かざるを得ず莊子は東洋中の一派玄妙なる哲學なるも、素と老子に學びて老子に倣はず。寧ろ釋迦や孔子の論旨と近し云々』と亦齋物論中にある、『倘不亦善乎。而問之也。今者吾喪我。汝知之乎。』を解し吾喪我とは古今獨步の妙筆なり、我は其形

體に就て云ひ、我は物我の對を云ひ現はしたるなり、即ち英語のIは吾にして、Myselfは我なり、之を英譯するに、Lost myself に相當す、論語の「毋意毋必毋固毋我」又は禪宗開山良介禪師が、「渠今不是我我今正是渠」も、皆吾喪我の意に外ならず、倘し物我の我を喪はずして、身中一點の私慾を狹むものあらんか、二六時中吾心靈は外役の奴の爲に掩了せられん云々の大文字もある。斯の奇僧は誰であつたろうか、方今禪林に其人ありと知らるゝ某師ではあるまいか、諸君試みに推當して見給へ。

◉新年の辭

天地一旋轉、歳茲に丙辰に改まる、四海萬邦皆新春第一日を祝す。

恭く、聖壽の無窮を祈り、邦家の隆昌を壽く、誠に歡喜の極なり、惟れば我大日本帝國は、今や明治勃興隆起の後を受け、大正改元より歳を重ること五回。

叡聖文武　天皇陛下は昨秋十一月を以て、登極の大典を擧げさせ給へり。

百禮既に備はり諸議此に全し、天下億兆歡喜天地して、陛下の萬歳を唱へ、朝政の皇張を仰瞻す。

史を按するに、我國運の隆興振作の顯彰せしは、明治時代に過ぎたるはあらじ大正の新天地は、將に其の勃興と振作の後を享受して、收獲を一代に計るの時代たらざるべからず。況や歳の内辰に在るに於て、其の最も因緣の淺からざるを思ふ。

辰は龍にして乾也、純陽にして至通の德を有す。我國上下二千五百年の、舊き歴史は、世界何れの文化と比して、其の本體を異にす。然も世界の異質文明を呑吐して疑滯する所なし。剛健にして至誠萬世一系の君主を奉戴して渝らざりき、國民性は全世界何れの國にも求むべきにあらず。

明法戊辰に始り、國運の進展將に振々として止むときなく、偶々晦蟄待時の跡ありしも、开は神龍

の深淵に潛み、其進退兩全を保ちしが如く、其宅や至深、其の出や至輕、進んでは外邦異殖の文明を攝收するに便、退ては自ら我國民性を涵養するに宜しかりき。見るべし、明治は我民族の歴史ありて未曾有の偉業を成就して、而も我特種の文明を傷くるなく寔に世界の驚歎を招きし、破格事たりし也。

今や明天子登極第一の歳、明治の第一年と同じく、龍を以て起るの吉兆を呈す。世界の大亂に處して惑はず、施置甚だ宜しく威武益々揚顯す。恰も飛龍の雲雨に乘じ九天に昇るが如し。眞に是れ我皇室の御稜威に由るは勿論なりと雖も、抑も又我國民の養ふや素あり、其力内に充ちて、其功外に發したるに外ならず、誰か其由つて來る所に推考して、發奮努力を思はざらんや。

此秋に方り、國民が最も戒むべくして力むべき事一にして足らず。歐洲の大動亂は既に三たび歳を閲して未だ終局を見るに至らず、戰局愈々益々擴大し、各戰線の爭鬪激甚にして、戰爭の持續寧ろ長からんとするの虞あり、其の政治上及び經濟上に及ぼし來る、狂瀾怒濤重疊窮極を知らず、且つや我國は將に大動亂の渦中に投したる、所謂交戰國の一員たるなり。然るに政治家の無識にして無定見なる、唯野心を遂ぐるに汲々として、内紛是れ事とし、敢て百年の長策を樹つるが如きは思も寄らじ、教育家然り、宗教家然り、實業家亦然り、無識と無策と野心は、我國現時の上下各階級を　する一大病患たり。

今の時は闔國一致、外に向つて展ふべきの秋なり。敢て區々たる内爭を容さず凡そ國運の進展、國

民の振張は冥々の間天の許せる一大約束の存するもの也。天は求むるものに與ふ、天は大正五年の新天地をして、大に外に展ふへきを許し給へり。曷ぞ之を求め且つ採らずして叶はんや。

大正丙辰の歳は、明治戊辰より起算して當に四十九年なり、唯夫れ長しとすれば長し、將た短しと言はゞ短し、天地の無窮、國土の不朽より見れば、眞に一瞬時にも値せじ、然も人生五十の定命より云へば本年は正に其最終期に屬す。維新の皇謨を大成するは、今日を措て何れの日にか定めんや。今は口に過渡の時代を唱ふるを許さじ、剛健にして眞摯なるべき、我國民は其無識を去り無策を除き、勿論其野心を放擲して、勇往邁進大正維新の大事業を達成せざるべからず。

◉神奈川版創設に就て

逝くものは流水の如く、昨日今日と思ひしに指折り數ふると、余が青年社に入り神奈川縣支部を設けて、之が主幹の任を辱しむるに至つたのは、本年の二月、まだ薄寒き殘の雪の消えやらぬ頃であつた、半年を越すこと三月と若干の日を重ねたのである、此間事績や如何と省みると、未だ以て素懷の萬一をも達するに至らぬのは、余が不能の罪で凱風畏友や辱知各位に對し、面目なく心密に忸怩たらざるを得ぬ次第である、然し又更に自ら顧みると、余が事業の豫期は其「プログラム」の一頁に過ぎぬ、遼遠なる前途に對する努力は今後である、瑣々たる事績の成否を今日に計算するは早計に失する、唯夫れ最善の努力を盡し行くべき途を踏み歩むべき所に向つて進むのが男兒の本分だとも思はるゝ、特に、『雇子もと百里の才にあらず、治中別駕の任に處らしめば當に始めて其驥足を展ぶべし』的の「セルフエスチーム」が行れざりし事情もあつたのである。

「チャンス」は來れり、最近の一日凱風社長と會し、紙面の改善、記事の選擇、特に神奈川版を創設し、多大の頁を割きて之に充つべきを協定したのである、是れ時勢の進運に伴ふ當然の結果とは云へ、什麼に神奈川縣が我社の爲に重視せらるかの一班を窺知するに足らう。

そも、神奈川縣は我帝國の關門に方り帝都出入の鎖鑰である、世界の横濱……東洋の横須賀も存在する、頭大右府が不世出の資を以て、覇業を開き七百年間特殊の文明を開拓したる鎌倉もある、面積敢て廣しと云ふにあらざるも、氣候温和、土地肥沃、產物饒多である、人口百廿萬の多に上り然も阪東武士の血を受け、剛健にして覇氣滿々、進取の氣象に富んで居ることは、當に全國に冠たりである、我社が本縣に重を置く所以も至當ではないか。

余は自今責任の一層增加せしを感ずると同時に、前途の光明を看取して愉快の情に堪へぬ、同人と共に一段のヘビーをかけて大に進まう。

（青、六、十一）

◉錦港たより

△遠來の珍客タゴール氏は、久しく富豪原氏の別墅三溪園の奥深き一室に閉ぢ籠り居たるが、去る二日には珍しくも慶應大學々生新聞有志と云ふ方面の二千名を限り講演會を開いた、其講演振りは例に依て妙聲美音雄渾典雅先づ演說の百般に於て申し分は無く一寸聽者を魅せずには置かなかつたやうである、此一事を措ては、氏は終日同園の濤聲松籟に耳を清め、潺湲たる溪流灑洒たる、裝飾に神怡び心暢て其詩囊を飽しつゝあつたやうだ、一方には物質界の寵兒鳥人スミス傷き、ナイルス殪れ、人慾の絶頂に其心火を燃して歐洲をして阿鼻叫喚の修羅場と化し、屍山血河百禹の生靈を犧牲に供して日夜肉彈を交換する、現世の地獄事實の悲劇を餘處に見て、寂寞無障の三昧に耽ける氏の境地こそ眞に欽羨に禁へぬ、が然し論說子の澪せる泣言を繰り返すではないか、タゴール氏は宗教家に非らず、哲學者にもあらず、又思索の人とも云へぬ、云ば純なる一介の詩人文藻の人に過ぎぬ、其錦心繡腸より絞り出す縹渺たる神韻は誦すべく聽くべきものならんも、我俗界塵寰の生活に何等益する所が無いようだ、吾人は今の世に詩を作るより田を作れを念とせざるを得ぬのを悲む、彼の有名なるタンマバラ氏は遙に邦人某に書を寄せてタゴールは一詩人で、宗教家でなく哲學者でなく亡國の一遺臣に過ぎぬ

から、新興國の士君子に何等敎ふべきものがなからうと、云て來たさうだが、吾が意を得たる至言である。

△當市新附の子安獵師町沿岸埋立を許可せられたる、守屋代議士が前年澪設置問題で漁民の反對を受け、當時竹鎗席旗的の騷動を惹き起し大に手を燒たことのある、苦き歷史附の其の澪に通ずる、三筋の航道に這回鐵道院にて鐵軌の架橋工事を無しつゝあるところが其高さが滿潮八尺を標準とせしがため、漁民は勿論海に因つて生計を營むものは倏ち船舶の通行を禁せられしも同樣の狀態に陷り、數百の漁業者の死活問題として守屋代議士時代の騷動以上に大騷擾を惹起すべく形勢がある、成る程滿潮八尺の高があれば　一寸と考ふると普通漁船位は通航に支障ないやうにも聞るが、夫れは實際を知らぬ机上の測斷である、船舶の水面を離るゝ部分は八尺に滿たぬとするも、船舶は獨りで動くものでない、之を行るには櫂と櫓と帆との操縱を人間がせにやならんのである、故に船舶を行るには此等の積量をも加筆せんけりやならんのは當然である、とは漁民等の主張する所である、之が爲に既に數回市役所にも迫つた、縣廳にも押し出した、鐵道院及農商務省にも懇請哀願したが、今以て埒が明かぬ、例の俠盲代議士高木正年氏の如きは非常なる同情を以て、漁民等の爲めに奔走盡力する所がある、同氏は激越の句調にて、如何なる事情存するも當局の處爲は不當である、況や漁民の要求に應じ一二尺架橋を高めたとて莫大の費用を要するにあらざるは勿論、軌道成立の上に何等支障の生ずべきにもあらず、眞に一擧手一投足の勞にて足ること故是非漁民に滿足を與ふる解決をしてやりたい、何つもなから役人共の非常識より良民に迷惑を蒙らしむるは苦々敷こと也と語つた。

△近頃本縣にては、警察官の醜行沙汰が少しく遠ふのけたりと思ふも瞬間、這度は敎育界の摧樓が續出せるには驚嘆の聲を發せざるを得ぬ、最近斷罪せられたる三宅市敎育課長を始め久良岐小學校長等二三敎員の醜行の如きは、偶々曝露せる惡事の不幸兒犧牲者に過ぎざるらしく、之を把羅剔抉せば其隱れたる方面に於ける罪惡夥しき數に上らんとは、某消息通の憤慨談なるも、記者は全然之を信ずるとにはあらねども又斷然否定するの勇氣なきを悲むのである、然し記者は少くも當市にある中等校長の人格其ものには信賴するに足ると思ふ、先づ相澤高女女師校長の謙遜推讓の美德者たるを筆頭に、木村中學の溫厚諄朴、美澤商業の克己精勵、橫濱高女の福德圓滿の長者として相容して、子弟兒女を托するに足るべしと信じて凝はぬのである。

△當市開港五十七年記念の祝賀は先づ型の如く行はれたり、宴會、煙火、軒燈、提灯行列等例に依つて例の如く、賑かに無事に了まつたは芽出度々々と云はざるを得ぬ、然し吾人此の吉辰に當つて安に不祥の言を放つとにはあらねど、今後十年廿年と過ぎ再び五十七年の記念日來るのとき吾人子孫をして今日吾人の發する芽出度の歡聲を發せしむるを得べきやを懸念に堪へぬ、橫濱港が近年次第に衰運の兆しありて心ある人の眉を蹙めしめつゝあるは掩ふ可らざる事實である、思に都市の發達歷史より觀

察すると横濱は非常に成育が早き丈け各機關並行せる完璧の體軀を有せぬ、云はゞ畸形的發育の結果は早老殊死は免れぬ、が然し虚弱の天質を稟けし者も、其攝生養生の遣方如何に依つては、反つて天性の健康體に勝るの長壽を保つことあるが如く、人爲的に港灣の設備を完成するとか、工業招致策を攻究するとか、今後の健康增進的努力に依て天壽を完ふするに至るのである、横濱を愛護するの思念熾烈にして過去五十七年を追憶する程の市民は、吾人と感を同ふし斯不祥の言を咎むるが如きことなきを信ずる。

△前項に工業の招致策と云ふことを鳥渡例言したが聞けば前に市會にて決議し既に出願人淺野總一郎と協定濟とまでなりし、而も夫れまで漕ぎ附くるにはイヤ利害、イヤ感情、イヤ黨派的と散々原春いたり揑ねたりしたる末であつたにも拘はらず、港灣調査會の一聲にギャフンと來ては市會は器量を下げること夥しとあつて市長議長打揃ふての大々的抗議と出掛たりと聞き、一時頗る人意を强ふしたか何ぞ馬鹿々々しい、海軍、鐵道院、遞信省、まつた横濱船渠にまで氣兼しての哀請嘆願であつたのである、口惡なき京童は云ふ工業招致策大施の手前嚮きには表面贊成なりしものも横濱船渠の株主等が或る野望を達するに障害あり、密に調査會に手を廻し、扨てこそ豫期の不認可を見るに至りたる也と、まさか其んな事もあるまいて。

（新、五、七、一八）

◉新年の辭

勇猛不退、不惜身命は傑僧日蓮が信條の一也、余は平和の遊兒たらんよりは戰の勇士たるを望み、虚榮の一友を得んよりは眞摯なる百敵を求むとは、西哲ニーチか警語の一也、吾徒日蓮ニチーエの絶對崇拜者に非らずと雖も、其烈々熾るが如き精氣、其儼乎鐵の如き堅心に至つては、採つて以て當世の鑑と爲すに足らん、生々潑溂、洋々として多望の前途を有する吾徒が、大正丁巳の新春を迎ふるの意氣と、之を送るべき感慨は、將に日蓮ニチーエの信條警語にレゾナンスする所莫くんばあらず。

夫れ新年を迎ふるの期待は、戰陣に臨む第一歩たるべき也、敢て平和を望むと云ふ、業に已に活潑發地の雄心壯志を消耗したる衰兆たり。

人間乃至人間の結成體たる國家及び社會なるものは、不斷の戰鬪裡に終始すと云ふも過言に非らず而も戰爭は意氣の對抗也、勢力の反爭也、故に意氣の消長勢力の盛衰に依り優勝劣敗の決は定まる也。

戰爭とは人生免れざる生活上百般の事實也、豈劒戟砲火の間に起る流血飛肉の慘劇のみ指稱すべき哉、要は人生勝利の榮冠は、嚴肅なる緊張と滿幅の覇氣ある者に與ふべき、天の使命を爾に誨へんが爲めの熱語たる也。

想に西歐の戰亂終局は永くも本年を出でざる可し、千萬人の生靈を殞滅し、百億圓の巨財を蕩盡したる這次の戰亂は曩古の事變にして、世界をして戰慄せしめたりと雖も、吾徒は斯る戰亂が將來幾回を繰返すべきを豫想すると同時に、近き未來否な目前に横る、東洋を中心修羅場とする全世界經濟戰の開始せらるゝ曉、什麼流血飛肉の大戰に勝るべき慘澹たる光景を呈すべき乎を思念し、轉々肉躍骨動の感なき能はず。

吾徒を以て兇險事を好む者と誤る勿れ、吾徒猖介不羈なりと雖も庶寧和樂の愛好すべきを知る、抑も戰は凶にして力也、平和は順にして愛也、能ふ可くんば凶を去り順に就き、力を棄て愛を取らんとの意切なるものあり。

嗚乎、唯夫今の時に方り、世界の大勢に達觀して、平和を望み庶寧を欲する迂愚にして、苟も偷安の一日も容すべからざるを知り、決然進んで戰渦に投じ名譽の勇士たるを聲明する所以也。

若夫吾徒が懷抱する帝國主義、而も靈内一致の第三帝國が、我金甌無缺の國體に體現實合せしむべき偉大の主張を高唱するに至つては、歳と與に新に且つ力あるものあらん。

（新、五、一、九）

◉横濱三元老と筆

吾人が横濱市の三元老を選定し、三長者と尊信する、小野君は弘化二年生で七十三歳の元老中の年少者、大谷君は小野君より一年の歳上、木村君に至つては天保五年八十四歳の年長者である、而も何れも鏘鏘として壯者を凌ぐの健康を保ち、大隈候の百二十五歳說を冷笑すると云ふ羨むべき芽出度長壽者揃である、所謂有德者有壽とは此三元老に當て箝めたるの言であるかのやう思はるゝ、三元老は身を商估にこそ委ね居るが、篤學有德の君子人であつて、其富力と信望を有意義に用ゐ、由來社會國家の爲め裨補したること尠なからぬ、何れも有位帶勳の榮典を荷ふ程の功績者で、大谷、木村兩君は前貴族院議員、小野君は現に其職に在る、吾人は此新年號に三君の肖像筆跡を揭げて、聊か平生景仰の意を表し併せて其福壽を祝す。

（新、六、一、一）

◉我紙の題字執筆者

寧静木村利右衛門君は錦港實業界の覇者たり、而も文藻彬々として富贍、特に漢詩を善くし、健筆を以て名あり、彼の鏘鏘たる老軀を驅つて、日々繁難なる各種の事業を經營處理し了つて、風薫り青葉滴る〻涼氣を罩むる、野毛の山莊に其一日の塵熱を洗ひ徐ろに錦心を練り、繡腸を遣る時、我紙毎號の文苑欄に現はる〻、秀章麗句は物せらる〻也、然り我紙初頭の端儼壯重なる（横濱第三帝國新報）の大文字こそ、君が染筆に成りたるもの也。

（新、五、八、十四）

◉涼　み　臺

人には勿論好き嫌ひがあるから一概に論斷も出來んが、山が好きか海が良いかと云ふなら、僕は山の方が好きで良いと應へる、特に夏の山は一層可い其のくせ僕は山國に生れながら、幼少の時から海の方に多く經驗を續くべく餘儀なくされた運命を有つて居つた、些と黴臭いが、人生塞翁の馬とは少くも僕自身半面の人生觀に裏書して居る……而も僕が山を好きな心裏咽きの聲を聞くと、海は何となくケバ〳〵しくて騒々しく、露き出しで、街氣があつて、俗脂粉々の態度があるに反し、山は何となく落着があつて森閑で、壯麗で、眞面目で、仙姿瓢乎たる氣分がある……此區分が僕の好惡の因つて岐る〻點である、一方を放縱なるお轉婆娘？とすれば、一方は嚴肅なる家庭内のお姫樣？にも比すべく、僕は其のお轉婆が嫌で、深窓が好きだ。

△僕の家に十數年培養せる、可なり根張りも強く、枝振りも整つた、三州産夫婦松の盆栽がある、僕は獨り極めに兩幹の一方を男松とし一方を女松に擬して、双々偏彼なし愛撫を均霑した、然るに何ういふものか幾ら培養に甚深の注意を拂つても女松の方が獨り勢力を專らにして男松の方は日に萎縮して、遂に枯死するやも圓り難き狀態となつた、僕は最後の手段として涙を呑んで生木を割いて別棲せ

しめた、畢竟離縁を斷行したのであつた、所が妙なもので別居後は反封に男松の勢力を回復し女松は次第に凋落し來つた、若し女松に靈あつて口が利けるなら僕に向つて、元の箱に收めて呉れと哀訴する所だつた、僕は其時、態!!見やがれと云つた幕だ。

△僕は性來酒が大好物であつた、既に高等中學時代には一廉の酒豪を以て内外に聞えたものだ、由來三十年の半生涯は此好きな酒の失敗歴史を以て全頁を埋草としたと云ふ觀がある、夫れで隨分家族、親戚、知己の間に心配もさせ迷惑も掛けた、仙臺の第二高在學半三日三晩青樓に流連して第三年の學期試驗をフイにし退學の已むを得ざるに至つたこともある、又或る時田舍の旗亭で飲んで二階梯子の中段より墜落して脾腹を打ち爲に半年丈り苦しんだ、而も家内には人力車が顚倒して怪我をしたなどゝ空々しき虚言を吐いて誤魔訛して居つた、又或る歳の正月回禮に泥酔して某紳士の邸に三回も行つてお目出度を陳べて同邸を驚かした、其後所用あつて同邸を訪ふた際、家人は僕の顔を見るとイヤにニヤ〳〵して居て主人は苦い顔をして例時と調子が變つて居た、遉が妻君は情深き女である……先達ては御丁寧に再三御回禮を蒙りまして……と暗にニタ〳〵と苦い顔の緣由を婉曲に話されたので、始めて事相を知つた僕は大は面目玉を蹈み潰し、大事の要件も狐鼠々々に辭して歸つた、爾來同主人よりの信用地に墜ち暫く出入も出來ぬ始末となつた、又或る歳の暮の大雪の日であつた、寒さ凌ぎとあつて朝酒を呷り横濱より八王子迄の汽車に乗つた、車中熟睡して八王子を夢に過し、甲州の猿橋にて

ふと目を醒した時は最早夜の十一時過で戻りの汽車は無し途方に暮れて居ると、粹な驛長サンの取計にて肥料を滿載せる貨車は潜乗さして貰い僅に八王子に迄引還したが、八王子の知已は僕が同夕刻まで來るべき筈なるに來らざるより、電報にて來否を僕の宅に照會したるに、正に何時何分横濱を發したとの返電に接したるより端なく茲に一場の喜劇を演出して警察に捜索願を出すやら、鐵道院に依頼して各驛を調べるやらの大騒動を惹き起した失策もある……斯る事例を擧げ來つたなら際限が無いから此邊で擱筆しやう、と云ふ風に僕は是迄酒の爲に蒙りし害毒? 酒より起りし罪惡? が僕が半生の徑路を汚損して居つた、然るに天の懲罰が已の覺醒かは知らぬが、此春劇烈なる痲疾に冒され醫者の熱誠なる忠告と、病氣の熾烈なる苦痛とにより斷然禁酒することゝなつた、禁酒の僕が生命は更新せられたやうだ、啻に消極的に酒の失策やら害毒やらを除くのみならず、積極的にも利得する所至大である何うも酒は惡いものだと遲蒔ながら感づいた。

△僕は何うしても支那人は虫が好かん、日支親善などゝ八釜しい今日恁んなことを云ふのは面白くないかも知れんが實感だから仕方がないつい二三日前の晩にも吉田橋際のカフエにアイスクリユームを飲に行くと、眞向の一卓を占領して頻りにハイカつて、ハムサラに生が好いなどゝ氣取り、加之にチヨツキ拔の白リンネル背廣に琥珀のネクタイを胸長に垂れ、パナマ帽に白靴と云ふ一廉の紳士風の二人のチヤン〳〵「ムスメチン、ベッピンタイ〳〵ヨーハー」でお里が露顯したにも一切無頓着の與太振

りを充分發揮せし揚句、彌々勘定となると態度一變例の吝嗇根生を遺憾なく曝け出し見榮も何もあつたものでない、ムヌメサン、ワタシビール二杯飲みあります、代澤山アヨマスダイヒクヨロシイ」と苦情を云出して女中を手古摺らせ、結局一杯の代を拂つて何かチャホヤ！囁き合ひつゝ去つた、跡で女中共は彼れだからチャンコロは好かないね、ア、嫌だ〳〵。

（新、六、八、四）

◉詩星　タゴール來

印度の思想家、否寧ろ世界の詩星タゴール氏は來れり、彼天來の風格と、玉の如き美音と雄渾なる能辯を以て、隨處に日本將來の文明を讃美し、新來の西歐文明を呪咀せり。

思ふに彼が天禀的卓拔せる思想の皷吹に依り、彼が韻神的音調の雄辯に由り、我新蓄思想混亂の過渡期に際し豁然として覺醒せる如く懷古排新の思想慨然として勃興するものやも量り難し、是れ彼が風格と雄辯の國人をチャームすべき威力あるが爲めなり。

素より彼が如き世界的詩星が日本固有の文明を憧憬し居る崇高の人格に接し親〻彼の口より我國上下二千五百年來の文明の價値を聽くに至つて誰が快然として欣躍の情動かざるものあらん。

然れども吾人は思ふ、極端なる新文明呪咀の聲を單に詩人の風吟に過ぎずと聽くは可なり、將に新來の詩星として之を歡待するも又固より不可なしと雖も、全然彼が思想に傾到し彼が所說に聽隨することは戒めざるを得ず。

抑も精神的文明の尊重すべきは勿論なれども、亦物質的文明の必要をも忘る可らず、去月東臺寛永寺に於ける歡迎會席上大隈首相の演說中、東西文明の調和なる語あり、恐く首相の語意は吾人の云ふ

物質精神文明の調和なる意義を含むものならん。

敢て哲學上より人間生存の意義を尋討する迄も無く、世界の歴史を繙かば、其精神的文明と物質的文明の並行調順する國民にして始めて、繁榮と幸福を享受せしに非らずや、吾人生存の條件に精神的進歩を含むと同時に又物質的發達を要素と爲すことも決て忘る可らず。

タゴール氏の說く所畫く是れ一種の詩也、其高韻風懷欣誦し景仰すべきものありと雖も、其高韻に魅せられ風懷に醉ひ、新文明を呪咀し、物質的文明を排斥すべき、片跛的思想に囚はるゝは大に戒むべきことに屬す。

要するにタゴール氏の來朝は、我文明の進運に何等益する所なく、寧ろ興國的民心の良傾向を阻害すべき一動機たらんとを恐るゝと同時に遠來の珍客として將た稀世の詩星として敬意を表す。

（新五、七、十八）

◉陳閑文聞

【一】

△大隈內閣瓦解尖頭伯の躍動元老の推薦新黨成立急轉直下而も是皆豫定の行動耳△吾人敢て先の見明を矜るに非らざるも政變の到來必然也と昨秋早く已に豫報す△隈候平生口を開は立憲の大意を講釋す而も其骸骨を乞ふに至る口實一向駄目也△曰く老軀重任に堪へずと候の老軀今更初りたるに非ず而も百廿五歳廣言奈何△候たる者平生の大言壯語にも似合はず一二月の議會を前に控へ辭職とは何事ぞ、△候が黨閥に上るや世人期せずして翕然を之を歡迎し枯木再び春に逢るの觀ありし△世人の期待國民の翹望候の一身に蒐る所謂人氣の盛なる之古今未曾有と稱せり△流石の政友會に手に餘し閥族又聲を潜む此時此際候たる者曷ぞ勇躍一番せざるや△新黨成立せるも壞物の繼き合せの觀ありて加藤子純粹の才幹有無試金石たり△加藤子たる者例之隈候の偉大に及ばざるも彼又當世稀觀の一偉材たるを失はず△加藤子新黨成立初頭成したる生氣滿々たる宣言は大出來未來の大宰相貫祿充分△大舞臺を脊負て立つ覺悟の立派さ加減彼の意氣なかる可らず頗る人意を强ふす△閥族官僚幾ら焦せつても民意を代表する政黨を無視する樣では永持は覺束なし△單に善政を施き良績を擧ぐると云ふは專制政治の遺言に

して憲政の本義に非ず。

（新、五百、十五

【二】

△羅國參戰希王退位は獨逸の打擊たるに相違なし而も獨帝の意氣たるや一倍と猛△新に參謀長を代へツエルベリンを增し潛航艇を驅使しての奮鬪振り劫々侮り難△甚麼最負目に視ても現下の形勢にては聯軍の勝目尠なしとは我參謀部員の談也△斯くして歐洲大戰の終局は幾年の後にあるや我當局實業家迷はずに確かり頼む△大きな聲では云はれぬか世の中は何が幸になるか分らぬ六億の正貨滅多見れぬ△貧乏を以て矜る程莫迦〳〵敷は莫けん東方の君子團など〻煽て呑に乘る事勿れ△外交の妙諦は云ふ可くして語る可らず霞ヶ關連中隅に置けぬ豪傑多し大に安心△云ふ迄も無し支那に對する外交は手嚴を可とす由來同國に宋襄の仁を施も成功無△三派合同計畫實業家側の反對にて一頓挫の姿たるも機運は來り居り今一呼吸△憲法政治の妙は二大黨の對立に因て始て運ばる官僚閥族の隙を覗ふ餘地無し△政權授受は輿論の向背に依るは勿論也動もすれば大權を云爲するは憲政の賊也△獨り憲政の賊たる耳ならず實に皇室に對する不忠者也宮中府中混糅由來亂世因△支那四國借款成立せんとする噂さあり英佛露日にて一億萬圓日本も始て大國的△更に露國藏券引受七千萬圓の約と云ふ愈々以て日本も債權國となるべく〻期待す△言ふ勿れ十七億の借財國と商法の秘訣は其麼な處に在る借金に若む勿貨金亦然

△要は財政經財の機界と遺繰りは旨くやると行らざるとに依つて利害立處に反す△其局に當る者政府の官吏と云はず民間の實業家とを問はず凡て大に緊褌一番せよ。

（新五、九、八）

●小野家別墅竣成

横濱港生糸界の重鎮、多額納税議員小野光景氏別墅の一なる、本牧大谷戸なる舊館は古雅なる名建物であつたが、不幸にして昨年祝融の災に罹り灰燼に皈したので、爾來再建に着手し工程を進め本館は今夏既に竣成を告げ、目下は其外廓庭園等の殘工事を餘すのみとなつた、記者の概觀する所では境域其ものが既に形勝の地位を占めて居ることは云ふまでもなく、何處迄も自然の景趣を傷けずして、背山面海の間、點在せる青松、透迤たる砂徑を通じて、遙に丘巓御社殿風なる本館が半は雄姿を隱現する鹽梅は如何にも筆に云い表はせぬ趣がある、彼の徒に布石配樹等に腐心し反つて靈境を俗化する成金等の設備では斯う云ふ趣向は出來ぬ、足一度此境地に容らんか、忽ち心地清澄俗界を脱し、一種崇高の感雄大の氣に打たる樣である、細かい事は別に書くことゝするも、此別莊の特長はアーライフイシャルを加へずして、主として自然の景趣を失はざるに苦心したる跡にある、僅に一丘谿を隔てゝ有名なる原氏の三溪園が雅俗混淆的に金ピカもあれば古雅もあり、野趣もあり、銅像もあれば三重の塔もある、ペンキ塗もあれば茅葺もあると云ふ、復雜なる配別に比し、素朴簡古の内に云ひあらはさぬサムシングがあり、一種のレゾーナンスを感せしむると云ふのは何んであらうか、兎に角名園三溪原氏別莊とは能きコントラストである、記者は我錦港に斯る名園の一を加へたるを矜りとすると共に小野氏の趣味を通じて其人格のサブライムに感する。

（五、十一、三）

◉大典奉祝の辭

天高氣清、本日の佳辰を以て我、皇儲裕仁親王殿下は、立太子の典儀を擧げさせ給へり。

恭く惟に皇祖　神武帝が豐葦原瑞穗國を統べ給ひしより、神統連綿二千五百七十六年、曾て神器を窺偷せし者なく、繼紹の紛更を容さず、不文の憲章燦として日星の如く、眞に天壤と彊り無き也。

明治大帝陛下英邁の天資を以てして、克く中興の大業を遂げさせ給ひ、新に憲法を欽定し、皇室典範を勅して以て、皇室繼紹の大典を明章せさせ給ふに於て、金甌無缺の日本帝國は滋々其光輝を顯揚せられたり畏くも。

今上帝陛下昨秋擧行あらせられたる即位の大典は即ち其憲章典範に遵由せられたるものにして、今又神統直系の皇長子たる、殿下立儲の式典を擧げさせ給ふ、微臣等恭く、大帝陛下の鴻業偉績に景仰の情勝へざると與に、我　皇室と國家の隆昌繁榮今日の如きに幸會し、感激極まつて一辭の頌す可き莫きを恐る、微臣等茲に謹て、皇壽の無彊を禱り殿下の萬歳を賀し奉る。

（新五、十一、三）

◉宣　言　書

新聞雜誌の權威と勢力は絶大也、而も文明國に於て其最も然るを認む、是れ輿論の原動力、人文の發達機實業界の先驅者人生の羅針盤、人間活舞臺の反照器を以て任ずる新聞雜誌夫れ自身が、業に已に文明の利器たるが故なり、換言すれば新聞雜誌の有する特權と重責に附隨する條件が文明の最大要素たれば也。

左れば、歐米先進國に於ける新聞雜誌の權威と勢力の重大なるは勿論、其發達の顯著なる眞に驚異に値ひすべきものあり、其一管の筆一行の記事も、時に王冠を傾け、政府を仆し、議院を動し、域外萬里の狀勢出來事座ながら囊中に物を探るが如く、內政、外交、軍事、敎育、實業、文學、美術、宗敎、衞生と云はず、有らゆる科學の方面迄、各專門的智識を一紙の上に網羅して餘す所なく、單に事實の反照器を以て滿足せず、眞個社會の耳目たり、將國家の木鐸たらずんば、決して已まざるの傾向あり

顧るに我國の趨勢は稍々覺醒の目を開きて新聞雜誌を視るの期運に到れるが如しと雖、未だ以て歐米先進國に及ばざる豈啻に數歩のみにして止まらん哉、特に吾徒の甚だ遺憾に堪へずとするものあり

何ぞや曰く、我國新聞雜誌の多くが政黨又は權勢家の傀儡機關たるに甘んじ、翼然として不羈の天職を守る操觚者の尠少なるにあり、曾てカーライルは新聞雜誌の天職と題する一論文を草して曰く『言論の自由は文明の賜ものなり、此天與の賚ものゝ大半は新聞に依つて有功に保有せらる、故に新聞の價値は拘束せられざる自由の言論其ものに在りて存す』と果してカーライルの論ずる如く、新聞の天職とは何者にも拘束せられざる自由の天地に不羈の言論を上下するにありとせば、我國新聞界の大半は自ら其天職を放棄し併せて權威を沒却するものと云はざるを得ず。

世界の横濱港を中心とする矜りある我神奈川縣は、海陸交通景勝利便の地を占め、商工業の殷盛、生産力の豐饒優に他府縣に冠たり得べき地位にありながら、事實は萎靡不振を極め、貿易に於て將に神戸に凌駕せられんとし、商工業に於ては既に大阪名古屋に及ばず産業に於ても二流以下に壓倒せらるゝの狀態にあるは何故ぞや想に理想的新聞雜誌の缺欠に主因するに非らざるなきを得んや、試に指を屈するに横濱、横須賀、小田原等を通じて、新聞雜誌の發行せらるゝもの現在四十有餘種の多きを以て數ふるも、何れも微力無勢僅に其形骸を存するに留め、堂々として其權勢と利祿の壓迫に抗し、主義的信念を把持し、毅然として政治、經濟、社會の各方面に亘り、之を利導開發發奮感孚せしむべき重任に耐へ得るものに至つては、我徒不明にして之を發見する能はざるを憾とせざるを得じ。

今や我國は一等國の伍伴に列したりと云ふと雖も、其富力に至つては悲むべし未だ以て、英、米、

獨、佛、露の富强國に及ばざること遠く、二十五億萬圓の國債國民一年の負擔一圓とすれば五十年間を要して償還し了る僅微の負債にすら、目を睜り氣を矮するの狀態にあり、彼の英國が三百億の國債を豫期して戰爭を繼續し、綽々として餘裕あるを示し、亦米國が歲々幾億萬圓の國庫を充溢して殆んど使途に窮すと云ふ富力に比せば、豈雲泥の差に驚かざるを得んや、加之歐洲の大戰爭支那の動亂は、直接間接に我國の財政經濟より、其思想界に迄影響を及ぼしつゝある危機に方り、苟も志國に報る者夫れ孚如たるを得べけんや我徒が此間に起り天鼓を鳴らし、警喊を放つ所以聊平生國恩の萬一に酬んとする微意たるに過ぎず。

吾徒微力なりと雖も、威武も屈せず富貴も淫す可らざる底の覺悟を以て起てり。自由の天地は吾徒の境地にして。不羈の言議は吾徒の生命たり。經濟的一大見地に立脚する放射力の强鋭にして徹底的たる。有ゆる、政治觀、社會人生觀を渾然として融和疏通するを任とする、我徒の主張は其誇の一たるを信ず。

吾徒が『第三帝國』Thid-imperia の名を本紙題號に選みたるは他意あるに非らず、吾徒、が將に高唱せんとする主張が、端なく文豪イブセンの道破せる社會觀『第三帝國は靈肉一致の理想的帝國也』に共鳴せるに過ず回顧するに我國維新前の狀態は、靈肉共に頽廢せる自覺なき第一帝國に過ぎざりき、降て明治時代に至つては、其舊套を打破して理想の第二帝國を築成せるが如きも、仔細に觀察す

る時は、徒に理想に囚はれたる皮相の文明にして。依然として梧下の阿蒙たる內容不充實なる帝國たり。茲に於て乎。吾徒は蹶起して大正の聖代をして靈肉を調和し理想と現實を一致すべき一大使命を果さんとは企圖せし也。思に個人主義 Indewdualism 國家主義 Nationalaism 社會主義 Socialism 又は近代思想 Modenthought と稱する主義主張の如きは。何れも片眼跛足病的見地に偏局せるもにして。吾徒の斷じて組せざる所。況や實際我帝國の政黨。政派。官僚。財閥。宗閥等因緣比周の情弊殆と耐へ難きものあり。吾徒が超然として『第三帝國』の旗幟を飜して起つ眞に狀勢の己むを得ざれば也。

故に吾徒が政治。社會。教育。藝術を論評報道する態度は飽迄森嚴にして公正たり。特に吾徒が本領たる財政經濟を說き。國家の中堅たるべき青年及青年團を議し。社會の疑團たる婦人問題を解くに至りては。最も周到の意を致し。懇切の情を盡して餘す所なけん。

本日を以て呱々の產聲を擧げたる『第三帝國新報』の抱持する偉大なる企圖既に斯の如し。其懷抱せる遠大の志望已に右の如しと雖も。世路嶮難幾多の荊棘前途に橫たるものあらむ。之を菱除して猛進一番其彼岸に到達すべきは勿論なりと雖も。亦哺育助成の責務は懸つて世間同憂者各位の双肩に在らん。創刊に方り敢て宣す。

拾遺の部

◉函嶺の三人男

（フースヒー）

△鈴木善左衛門君▽……△川邊正之助君▽……△椎野吉五郎君▽

山河秀靈の氣凝つて偉人を出すも些と大袈裟に過ぎた言辭かは知らぬが、古來箱根の御關所を以て有名はる函嶺一帶の地には天與の靈泉隨所に汾湧して一層其名聲を博しつゝあつた――實際此歴史と靈泉を拔きにしても函嶺は本邦樂園の隨一たる價値を保つことが出來ると思ふ、見給い、海拔二千尺の絶巓には周廻數里に餘る蘆の湖に太古の碧水を湛え、朝暉夕陰富士の靈峰を倒影する奇蹟的絶觀を現出し、駒、足柄、金時の高峰峻嶺を中心とする連山の溪谷には清冽夏尙寒き潺湲の流れと爲り、時に鬼匠神鑿的に天工を恣にしたりと見える奇岩妙石の布置は恰も名匠の築庭したるかと訝るゝのであるいで深山幽谷に免れ難き缺點とも云ふべきは、山容充分なるも水態に乏しきことであるが、此處には更に洋々たる相摸灘の眺めも前畔に收むることが出來るのである、最も函嶺の絶勝たる記述は横に縱に別に記者が新聞にも雜誌にも冊子にも書き盡してあるから今茲には多くを語るまい、否な本記事の目的でないから省略するが、此名山に對照して相應しき三人男を紹介して見やう。

△鈴木善左衛門君　塔の澤の中段早川の急潭架橋の邊より有名なる丈餘の二重石垣を基礎として建

て列ねられたる大厦高樓の玄關廣間に、故伊藤公の健筆にて環翠樓の大額が高く大きく掛けられてある家の主人公が即ち鈴木君である、君は性頗る豪宕で細緻で義氣に富み、溫泉旅館としての凡ての設備待遇の萬端に行き届いて居ること痒所に手の届く細心と注意がある、彼の銀製大浴場の壯麗にして古雅なるは云ふまでもなく、二重石垣に至つては單に外觀の盛裝を矜る爲めのみで無く、彼が浴客に對する責任の重大を自覺したる觀念より出發したもので、現に去る四十年の大暴風雨で全山の破壞的大慘劇を演出したる時に獨り同樓が其災禍の內より脫し得たる事實は確に二重石垣の効果であつたのである、而も彼は一方斯る細心注意の人たると同時に、一方には冒險事業の尤なる漁業に巨資を投じ湘南斯界の巨擘として重を爲して居る、最近小田原に宏壯雄大なる邸宅を新營し世人をして驚異の目を睜らしめたのも、彼が眞意は虛榮に誇る無用の土木を起したとのみ思はれぬ、記者の推量を以てすれば、彼の邸宅こそ彼の雄志を靜養すべき適切の靈境たると同時に、座ながら其經營の大漁區を監視すべき活動壇場に充てたものと思はるゝのである、彼れは劇烈目も眩せんばかりなる二大事業の經營者として他に手足を伸ばし若くは身心を安んずる遑なかるべく見えるが、英雄閑日月ありで、書畫骨董の趣味深く其鑑識眼は非凡の明を有し愛藏する珍品鮮なからずと云ふことだ、特に彼の敬服措く能はざる一事は公益國利の爲に私財を吝まぬ貢献すべき犧牲的努力である、箱根新道の開通、殖林、交通機關の設備等に陰に陽に此翁の盡瘁したる功績は枚擧に遑ない、又彼が交遊は各方面に亘り甚だ廣く、故伊藤公、犬養木堂の如きは無二の親交者の內であつた。

△川邊正之助君　彼は酒匂村の舊家に生れ代々大地主樣として一帶村民の畏敬を受けし家柄に人と爲つた、併し彼が磊塊卓落の雄心は小作米の上り高を計算して一生を過すには餘りに輕輕ある境地であつた、果然彼は諸種の投機的冒險的事業に手を染め一現はるゝも自及後に閃くも微慎ともせざる百棟の堅膽も素を其處に作つたと云ひ得る、……酒匂、丸川漁場の所有者として鰤漁界の權威たる彼は昨年の大漁に一舉巨萬の資を恢復して、漁成金の名を恣まになさしめ、彼が勃々たる雄心偉圖の初級を卒へしめた、彼れ未だ春秋壯なり其前途の大抱負を遂獲千金の利を夢みた、が運命の神は一つとして成功の鍵を彼が手に渡さなかつたと同時に、彼を悲境の淵の最底迄押し附けねば已まなかつた、が此境地こそ彼が他日奏功の試錬場であらねばならなかつた、彼が今日百發百中的の機所を捉らえて外さぬ商略も、銃口前に

川邊正之助君

行する道程に幸ち充ち〳〵として光明燦爛たるを覺ゆ。

△椎野吉五郎君　村長、郡會議員、縣會議員等有らゆる地方自治制度の機關となり、自治の發達と刷新の爲に盡瘁したる彼は縣下刷新派の中堅として推重せられ居るの外、彼が經營する國府津驛汽車辨當の聲價は東海道線旅客に普く喧傳せられ、旅情を慰する一つの名物たる評判を博して居る、國府津驛と云へば東華軒の辨當を連想せしむる程、其名聲を廣めたる彼が經營上の手腕が非凡であることは勿論であるが、其眞因は彼が尋常一樣の商人根生を離れ公益本意より發露する一種の美德事象とも云ひ得る、一事は萬事である、彼が百般の公私動靜を測るべきバロメートルたりと信ずる、宜く彼の自重を祈る。

◉閑却すべからざる食料問題

（評　論）

歐米各國に於て近來最も重大視せらるゝ一事は戰爭の勝敗以上に常食料問題の夫れ也、特に英米獨伊の四大强國は期せずして官民協力の食料研究會を組織し有らゆる知識を羅致して熱烈なる態度を以て其調査攻窮に從事し旣に有益なる結果を公表したるもの一二にして足らざる狀勢也、然るに我國は反つて一時的戰爭の餘醇に醉へ奢來淫靡の風上下に瀰蔓し食料問題の如きを口にするを賤しとして顧みざるは慨すべき事象たり、唯茲に君人の密に意を强ふせるは我經濟學界のオーソリチーにして而も躬行實踐主義の大宗たる現東京市長子爵田尻博士が孜々として勞費を厭はず、迫害に抗し、嘲笑に甘じ、毅々乎として其研究せる所信を公表する堂々たる態度と熱誠なる心事是れ也、近頃博士は又有志家の椎戴する御飯豆普及會長として脱脂豆を常食料と爲す可しと大聲叱呼之が宣傳に從事せり、其趣旨書の一節に曰く『近年物價の昇騰激甚を極め殆ど底止する所を知らずして國民狀態將に危殆ならんとす、若し此狀態を以て推移せんか國家の前途實に寒心に堪へざるものあらん、特に我國民の重要主食物たる米麥の騰貴は直接吾人生計の中樞に打擊を加ふるに至り中產階級以下の生活を其根底より覆さずんば已まざるの形勢を呈せり、而も政府及民間有志者の計圖努力も寸効なく一昂一低圓三舛臺を

持續すること二週年の永きに亘るは何ぞや、想ふに時局の影響と奸商輩の人爲的惡手段も其一因たるも可しと雖も、其主因は需給關係の不調即ち國民の需要する米麥の供給不足に基由せずんば非らず、(中略)況や國民の增殖率は歲々異數を以て進み到底土地の開拓、田畑の改良、培養の改善等に依つて增收する產額の伴ふべきに非らざるに於て哉、又況や天災地殃の變外米輸入杜絕の厄あらんか其慘境如何とも脫し得べからざる虞あるに於て哉、(中略)脫脂豆の原料無盡藏にして、而も滋養性分に富み且つ相當の美味を有し米價の約三分の一を以て供給し得べき米麥の代用物少くも補充物として當世無比の理想的主食物たるを確認せり云々(下略)』と是れ吾人の言はんと欲する所を盡したるものにして、實際我國民の主食物の大宗たる米穀の不足は爭はれぬ事實にして吾人の計算にては其平年作に於て七百萬石以上に上るのみならず、之を單用するときは一種の米毒に冒され健康を保持する所以に非らず、近着『ハウツーフヒードユーワフアミリー雜誌』に北米合衆國政府に於ては比律賓島民に脫脂豆飯を奬勵して同島民の米食に因する脚氣病を撲滅したりと明言し、更に同國農務省にては大正五年十二月告示第四三九號を以て一般國民に左の意義を布達するに見るも甚麽脫脂豆の効力偉大なるかを推徵するに足らん『前略、本品の食用は近年歐洲各國に於て重要なる研究事項の一となれり、我合衆國にても多年ロースターチタイエットとして研究し糖尿病患者の絕好食品なることを發見せり、(中略)ソーヤ粉は脫脂豆粉二十五小麥七十五の割合にて混製せらるゝものにしして英國市場にて販賣せらるゝ美味なるソーヤ麴麭と英國輸出品の一なるソーヤビスケットも又此粉より製せらるゝもの也、獨逸にては脫脂豆粉とライ麥粉を混合し黑パンを製造し大に需要擴張せられつゝあり、(中略)脫脂豆の成分は水分六、一〇灰分六、二〇脂肪四、五〇纖維二、〇五蛋白質四七、三〇含水炭素三三、八五なれば之を米麥の如き穀物と混用すれば其養價を增大するや明かなり、而て其混合步合は糖尿病患者には出來得る限り多量の脫脂豆を混じ、普通健康人には重量にて脫脂豆一に米又は麥を三とするを適度とせん云々(下略)と、依是觀之脫脂豆の主成分は多量の蛋白質とヴイダミンを含有する燐にも豐潤なれば健康增進の第一要件を備ふる理想的常食物たり、而も其價格の低廉なる市價の上より重量に於て米の半額容積に於て三分の一に相當するを以て直接一家の經濟に利し又間接には米價の奔騰を抑止調節に資す可きを信ず、彼の徒に空理に走り實行を後にし、或は高壓的に官權を以て一時を瀰縫するものと豈同日に談ずべき事態ならん哉。

聽說く、田尻子爵等の熱誠は漸々世人を警醒し來り、各地の兵營學校、工場、購買組合等の團躰に於て試食又は常食に採擇するものあり、京濱を中心として遠くは愛媛、靑森に普及するに至れりと、更に橫濱の紳商增田中村兩氏等の關係ある橫濱豆粕製造株式會社は普及會の誠意に動き於以上の精品を製出すべく多大の勞費を投じて工場を新設し器械を購入し、其製品を擧げて普及會に委し大活動開始に從事せりとのことなれば、不日理想的精良品は普及會に依り全國に供給せらる可しと信ず、吾人

は食料問題の前途を思ふに方り斯る篤志者の輩出したるを歡迎するものなり、嗚呼食料問題豈閑却輕視して可ならん哉。

◉與代議士戸井嘉作君書

（公開狀）

衆議院議員戸井嘉作君足下、僕常に當代の政客中景慕すべき一人者として島田沼南を擧げ居れり、蓋し敢て彼が卓見識量に敬服したりと云ふに非らずして、其の皎々雪の如き心事、其直情經行的の行動、其瑰麗流暢の文章辯舌を綜合して一人格を形成したる沼南其人を愛するもの也、側に聞く、足下亦沼南を百歳の知己として景仰措かざる一人にして、而も政治及私交に緊訂深盟して渝らざること十年一日の如きものありと、昔者莊子奇論を吐て曰く、往古の賢者は聖賢に私淑し、愚者は之を疎んず、方今の賢者は聖賢を疎んじ、愚者は反つて之に私淑す、余は往昔を歎び方今を悲む、と一見例の僻說なるが如しと雖も、翫味すれば又一道の眞理を個中に發見するに難からず、蓋し莊子の意を忖度するに賢者と雖も古聖賢に遠かるの意あるものを排し、愚者と雖も切々古聖賢を學ばんとする意志あるものを稱揚し、方今の輕薄無恥の趨勢を暗罵したるものならん、憶に愚者ならざる足下にして當時の名賢者に私淑し交盟するは莊子の暗罵を裏に行くものと云はざるを得ず、足下が人格的價値の認識略ぼ大過なきを信ず。

戸井君足下、僕十數日前、自著『北强文集』の序文を請はんが爲め沼南を東京麴町東三番町の私邸

に訪問し、談偶々當今の人物月旦評に及べり、彼は二三意中の人物を物色して現東京市長田尻子爵に及ぶや、口を極めて子爵の學識人格當今又得易からざる人傑として稱揚措からざりし、僕茲に於て益々沼南に推服するの念を昂めざるを得ざりし也、蓋し田尻子爵は僕が師表と仰ぐ學德兼備の士人にして、現に僕等が經營する國家的大事業の『御飯豆普及會』の會頭と推戴する大人物に在るを早くも沼南が之を觀取して我國人物の第一人者に意志に一段の敬服を値ひせざるを得ず。

戸井嘉作君

戸井君足下、僕の幻想かは知らざるも足下の相兒、態度、辯舌、主張に至る迄殆ど沼南の夫れの如く照影せるは又一奇ならずとせんや、足下今や神奈川縣憲政派の重鎭たり、自重して沼南と提携し將

た師事して其本領を持續せは斷じて其盛名を失墜するが如きことなからん、若夫れ沼南が皎潔なる心事と不變の節操を體得感取せんが、足下が身重は九鼎大呂の如くならん、足下たるもの勗めずして可ならんや。

戸井君足下、昔者聞く一鄉に冠たる者は一國に冠たり、一國に冠たる者は天下に冠たり、と足下が代議士として檜舞臺に登場せしは昨年の總選擧に始まりしに拘はらず、嶄然として既に儕輩を拔き陣笠圈を脫するの域に達せり、本縣選出議員中に於ては、辯舌にては政友派の赤尾君あり、縱横の策士としては足下の同僚小泉君あるも、足下其兩者を兼ねるに沼南の準人格を以てす、眞に鬼に金棒の觀ありて、將來僕等矚目の標的と爲れり、豈自重せずして可ならんや、豈自重せずして可ならん哉。

◉岡部菊太郎君（フースヒー）

△横濱三幅對の一人▽

魁偉なる體軀と堂々たる態度の所有者たる君には、斗牛を呑むの膽略と潑溂たる才氣を包藏して、今や横濱市政を其双肩に輕々と荷ふ副議長の椅子に甘んじて居るが、劫々君が滿々たる覇氣が斯る輕荷を脊負には餘りに喰ひ足らぬやう見受けるのである、君は栃木縣安蘇郡出の人で、東京同人社及早稻田專門學校に學び、明治三十年横濱に羽二重業を開ゐたのであるが、君が縱横の機略商才に充分なる學素を添加しての活動は忽ち斯業界一方の覇者として、少壯實業家の盛名を馳するに至つた、商業會議所議員、絹物同業組合長、市會副議長と云ふ重要の位置を隨所に獲得するに見ても、其識量の凡でないことが分からう、曾て記者は横濱少壯派の双璧として、中村、大濱の二君を此欄で月旦したことがあるが、玆に更に岡部君を追加して三幅對として眺めて見やうと思ふのである。

何れ記者が三幅對に見立てる程の人々であるから、其實質に輕重のあるべき筈の無いのは勿論であるが、外見は頗る異なる點がある、大濱君は清玉玲瓏たる貴公子の風あるも、中村君は巖丈武張つた武人の態あり、岡部君は温乎堂々宰相の容ありと云ふ有樣である・特に妙なるは實業家にして政治に趣味を有し、與に籍を憲政派に屬して居ることである、斯く容姿の異なつて居るに拘はらず、三君の性格や氣分は一致して居るものと見え、政治でも實業でも、一朝重大問題の起ることがあると三君の影は其處に現はれて、凝議し、畫策し、解決するのである、近い例に彼の取引所問題でも、船渠の內訌事件でも三君の形影相伴はぬことがなかつたのである、生理學上人間の氣質を粘液質、膽液質、多血質に分類してあるが三君には些と適設けず洒落の內に温味を持ち同情を寄せ、特に公共的方面には勞費を吝まず盡力すと云ふ風に、彼の成り上り紳士等が自ら持すること贅澤なるに拘はらず、人に對する酷薄なるが如き風は微塵も無いとのことである、果して然りとせばそは君が修養と學素の德とても云ふ可きであらう?、古人曰く學あ

岡部菊太郎君

るものは必ず德ありと、吾人を給かざるものである。

◉宮崎竹次郎君（フースヒー）

△羽二重染色精練業の成功者▽

成金――と云ふ流行語の内には種々の忌はしき意味を包含して居て、全然成功――意義を區別するやうだが、成るほど成金と成功には其原因に於て劃然甄別すべき差異を認むる、成金の方は偶然の出來事に乘じ、萬一の僥倖を以て澤山金を儲けたもので、其間に何等秩序的努力とか、組織的計畫とか正しき方法手段を用ひぬで金儲けをしたものを云ふのである、成功の方は精勵、忍堪、勤儉、善謀と云ふやうな正しき筋途を辿り來りて仕上けた成果者を稱するのである、宮崎君は慥に後者に屬する人であることを先づ記者が裏書して置く。

君は千葉縣香取郡神崎村の農家に慶應二年に產聲を揚げたが、大志ある君は一生を肥臭き農村に埋むべきでない、明治十五年未だ殘りの雪消えやらぬ三月初旬決然故郷の土を蹴て横濱に來て只管外國貿易の趨勢に着眼研究する所あつた、君横濱に在ること十年蚤くも輸出羽二重の加工即ち染色精練業の將來有望なることを看取し、某資本家の後援を得て市内初音町四丁目に一大工場を建設し、刻苦勵精有らゆる障碍を排し逆風に抗して築き上げたる堅礎は千歳動搖ぐべくも見えぬ迄に漕ぎ着けたので

ある。

君は他に之と云ふ道樂も無く、業務上の研究改良に沒頭するが唯一の趣味とするもの〻如く、日々其肥滿する躰軀を工場に運ばせ業務員職工等を愚蕃督勵して居るが、決して世の頑强爺や守錢奴ではない、所謂能く儲け能く散する理想的紳士の典型的人物である、彼の日露戰役などには後援事業の爲め多大の勞費を投じ奮勵努力した、又

宮崎竹次郎君

年前沒した妻君は隱れたる賢夫人であつて君が成功の內助に偉大の殊勳者であつたことである、其蚤世は惜しみても餘りある次第ではあるが、双者の間に擧げたる後繼者は模範的青年とのことなれば亦以て聊か慰むに足ると思ふ、（記者は他日龜鑑青年の題下に宮崎青年を叙するの下心あり）德決して孤た匿れたる慈善費に投入したる額も鮮少でないが、之が爲に名聞を求むる樣な卑心は毫頭ない所に君の人格が知らる。

君の成功を叙するに方り見逃すことの出來ぬ一事がある、开は數

ではない必ず隣あるものである、同家の將來多幸なるは疑ひない。

◉酒井增太郎君（フースヒー）

▽横濱型染合資會社の創立者染色界の隱れたる殊勳者世にも頼もしき美情家△

君は福井縣福井市の人で、幼年の頃より染色の技に趣味を有し、長ずるに從ひ一層之が意を堅ふし遂に是を以て畢生自れが事業とすべき決心を爲し、決然鄕里を出て神戸大坂京都の各地に於て斯業の名家に就き其技を磨き、後横濱に來つて石原工場に入り其勝れたる技能を發揮するや、忽ち斯界の評判となり各工場爭ふて資給を厚ふし之を聘せんとするに至つた、就中南太田町の秋山鹿吉氏は非常の熱誠を罩め君及石原氏に懇望する所となり終に退引ならぬ關係となつて、秋山工場に轉聘せらるゝに至つた後の君が、十二年間の献身的努力と其妙腕の擁燿とに依り同工場を隆々たる盛名を博するの運に達せしめ君が知己に報ゆるの任務は充分に盡し終いたのである、茲に於て君の如き有爲の器をして一工場の技術者に朽ちしむることを許さぬ事業界の形勢は、君を擁して横濱型染合資會社を創建し斯業の爲め大に貢献すべく計圖せられたのである、最も此計圖に參畫せしは始め秋山、山本、淺井三氏であつたが種々の事情湧起して遂に酒井君獨立の事業と爲つたのであつた、此事業の目的は單に染色其のものを以て利を營むと云ふ普通工場の夫れとは大に趣を異にし、新規の工夫により又は新考案を立て染色術の改良進歩を計る謂はゞ一種の研究所たる意義を含んで居るのである、されば君が創業後の經營振りを見るに、技術本位を以て社員を待ち優秀なる技能を有する淺井武平氏を技師長に拔擢して厚遇し、只管研究に從事せしめて居る、創業尙淺きに拘はらず、色の配合並に其調和に成功して特許權を得たるもの二、實用新案登錄を受けしもの三の多に上つたとは眞に驚嘆に値ひすべき努力ではあるまいか。

酒井增太郎君

君が斯業に熱

君は獨立後も同氏の工場に利便を圖ることに注意し、特に自己工場に注文ある在來の染色物の如きは擧げて秋山工場に移し、主として新考案のものゝみを取扱つて居ると云ふ一事は、當世事業界の道義頽廢、得意爭奪には如何なる手段も選む所なく、百年の親交も一朝にして仇敵たるが如く、所謂商買心なる天才的の人たることは略ば前叙する通りであるが、其情誼に厚き美しき人格の所有者であることも知らねばならぬ、君が永年秋山氏に盡した功勞は業に既に其知遇に報じて餘りあるのであるが、

敵を露骨に極端に發揮して憚らざる有樣なるに、君の心情の美しき人格の高潔なる世の龜鑑とするに足ると思ふ、君が信望日に加はり事業月に隆昌の域に進むも曾に技倆の優秀である丈けでなく、其人格が自然に人を引き着け、誠義が天を動かし福祉を與ふるのであらう。

正誤

何頁	何行	○正	●誤
三	九	如何となれば	如何とすれば
六	二一	人格は自覺	人格は自格
七	一	倫理觀を評す	倫理觀を表す
九	一四	捐稱	捐稍
二五	五	臆測	臆測
二八	四	自由	自白
二八	七	綱羅	綱維
三四	四	盛況	成況
三五	一	可らず云々と	可らずと云々と
三五	四	充飽	兌飽
三七	四	計策に外ならず	計策にならず
三七	七	對外放資	對米放資
四二	一	難を見て	難を見て
四五	一	自制	自刷

何頁	何行	○正	●誤
五五	七	增加固より	增加より
五五	一	比觀	此觀
五五	一〇	賢者	貢者
六〇	一〇	戰爭が繼續	戰爭の繼續
六八	五	然りと雖	然雖
七六	一	學會	學者
七六	一二	現はしたるもの	現はしたもの
七九	一一	惰弱	隋弱
八二	九	懷疑	疑疑
九〇	七	一喝	一聲
九一	一	協約訂結の	協約の訂結の
一一八	四	人こそ	人々こそ
一一八	九	君の	君に
一二〇	一	天學	大學

何頁	何行	○正	●誤
一二〇	二	火鉢	大鉢
一二二	二	戒止	戒論
一二八	二	大なる勞費	大な勞る費
一三四	一	樂な荷ひ	概な荷ひ
一四〇	八	鈴木君足下、足下と鈴木君	鈴木君足下と足下と
一四三	一五	荷も	荷な
一四九	二	私に	宏に
同	一一	方今	方古
一五〇	一二	勉めよ	逸めよ
一五二	一	所謂	得謂
同	九	伸張せられ	張せられ
一五九	一	鬱々	蓬々
一六〇	六	靜平な保ち	平生な保ち
一六一	一二	迎へ	抑へ
一六三	四	萩彩	萩表
一六四	三	富嶺	富澤

何頁	何行	○正	●誤
一六五	二	君等に	君等の
一七四	三	斷を下し	談を下し
同	一一	名正	名稱
一七九	一	事業な	事業は
同	一三	背裂	背裝
一八〇	八	這の	這は
同	一〇	踰え	踰ん
一八八	五	此陽報	比陽報
一九七	二	築き上だる	築き上なる
一九九	二	戰師	技師
二〇〇	六	鵜貪	雅貪
二〇二	三	螢雪	勞雪
二〇四	二	問はず	啓はず
同	六	奥まりたる	奥まれたる
二〇八	一	華詞	菅詞
二一二	二	令閨	令問

同	七	揚悠	掲悠
同	九	遣幅	遣幅
同	一一	コーヒーを吸	コーヒーを
二一三	一四	當るやうに	當るやうには
二一五	一〇	黯面	黯面
二二〇	五	巨利な	巨な
同	一一	行はる當世	行は當世
二二九	八	譬句	響句
同	同	便つて	便つて
二三一	四	山椒	山萩
同	一一	やりながら	やりやから
同	一二	甄歌	覗歌
二三七	八	虚飾	靈飾
二四〇	七	轟々	轟々
二四六	三	今日	今月
二四七	一一	煎餅	煮餅
同	同	剝がれる	薄かれる

同	一二	一肘	一時
二四九	二四	筆を下さん	爭を下さん
二五〇	一	頭が一定の	談が一定の
二五二	二	であるが	ではるが
同	一一	研り殺した	砕り殺した
同	一二	塗つた	立つた
同	八	白刄を	自刄を
二五五	五	舟	丹
二五八	一〇	拔擢	跋躍
二六一	一	數へらるゝ	數へられるゝ
二六六	一	せらるゝので	せらるゝもので
二六七	二	成功せる	成功の
二七一	一一	上下に	上下な
二七二	九	株守	株主
二七三	一	次兄	長兄
同	同	又郎	又勛
二八〇	一二	注目に	注目は

何頁	何行	○正	●誤
二八三	一	氣爽	聽爽
二八四	二	意氣	意義
二八六	六	雄辯	唯辯
二八七	二	受けたるを認む	受けたる認なむ
二八九	一〇	領領	領頸
同	一二	頑餓	頑壁
二九五	九	理想に出發	理想は出發
二九六	九	我戰	我轟
三〇三	七	醫學	醫者
三〇四	六	考量	者量
三〇六	四	妙術に	妙術は
三〇七	九	肺臟	肺腸
三一二	四	商賣敵	商賣の敵
三一四	六	稱賛の辭	稱賛の辨
三二〇	九	事相	事想
三二二	五	頑淵な	頑淵に
同	八	發すに依り	發する爲に依り
三六三	一	唯一	唱一
同	二	技倆	拵倆
三六四	一	陰森	翳森
同	二	感想などの	感想ほどの
三六八	五	修風	從風
同	七	予や	予が
三七〇	八	偶ふことゝ	偶ふることゝ
同	九	北征	兵征
三七三	一一	功業	工業
三七四	一	措て	於て
同	一四	凡俗	風俗
同	一五	凡俗	風俗
三七七	九	樂く	樂み
三七八	一	叩かるべしの	叩かるべしと
三八〇	五	歡天喜地	歡喜天地
同	一一	淪らざりし	淪らざりき

何頁	何行	○正	●誤
三二三	四	職服	服服
三二四	四	行屆きたる	行屆たきる
三二五	一〇	世人なして	世人として
三二七	一二	誠意が	誠意な
三二八	六	處爲	處世
同	一三	俊者	俊駑
三二九	五	輕んずる如き	害るが如き
同	六	曉業	職業
三二六	三	寡くは	寡くは
三三〇	一	緊き締った	緊く締った
三四五	一二	修養	修食
同	同	得ることは	得るゝことは
三四六	二	貴衆議員	貴衆議院
三五一	三	其人格	後段人格
三五三	四	逸材	又材
三六一	四	利益な	利益なな
同	一二	明治	明法
三九三	一〇	偏彼なく	偏彼なし
三九四	一	反對	反封
同	六	在學中	在學中
同	一二	大に	大は
三九五	二	貸車に	貸車は
三九七	三	我新舊思想	我新著思想
三九九	一	陳閥閥文	陳閥閥文閥
同	一	先見の明	先の見明
同	六	政友會も	政友會に
同	七	純卒	純卒
四〇〇	五	君子國	君子團
四〇二	一一	配合	配別
四〇四	五	皇位	皇室
四〇八	一一	横ばる	横たる
四〇八	一一	変除	菱除
同	一二	勿論	勿論

何頁	何行	○正	●誤
四〇九	二	有名なる	有名はる
四一〇	一三	彼に	彼の
四一二	五	發露	發情
四一三	四	寄侈	寄來
同	五	吾人	君人
四一七	二	直情徑行	直情經行
四一八	二	措かざりし	措からざりし
同	八	敬意	放意
同	一四	相視	相兒
四二三	一	成功さ	成功
四二六	二	己れが	自れが
四二六	七	擢燿	擲燿

大正七年九月五日印刷
大正七年九月八日發行

不許複製

【非賣品】

横濱市野毛町二丁目四十六番地
著作者　桑島彌太郎

横濱市三春町三丁目五十番地
編輯兼發行人　大木捨藏

横濱市北方町三百六十五番地
印刷人　行木勇

横濱市野毛町二丁目四十六番地
發行所　第三帝國社

（第三帝國社印刷部印行）

10
303

終